

- 1層 暗赤褐色土 天井部内側の焼けて粘土が落ちてきた層
- 2層 黒褐色土 自然堆積層。黒色土を主体とした土。ローム粒・炭化材が少含
- 3層 黒褐色土 天井部内側の焼けて粘土が落ちてきた層
- 4層 黒褐色土 黒色土を主体とした土。ローム粒・粘土粒含
- 5層 黒褐色土 黒褐色土主体
- 6層 暗灰褐色土 暗灰褐色土主体
- 7層 黒褐色土 黒色土を主体とした土。5mm前後のロームブロックとローム粒・粘土粒含
- 8層 黒褐色土 黒色土を主体とした土。ローム粒・粘土粒含
- 9a層 暗灰色土 山砂主体の土
- 9b層 灰色土 白色粘土ブロック

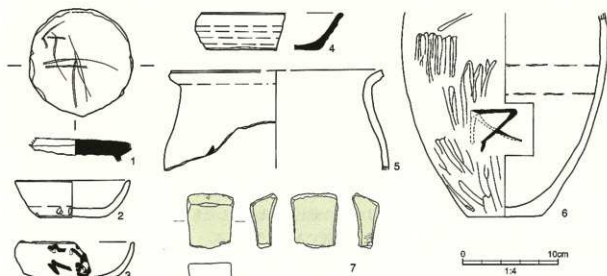


図112 A166

表46 A166遺物観察表

(単位mm)

No.	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 高台付坏	一×一×(23) ロクロ成形 底部回転ヘラ削り 体部ヘラ削り		灰 青	青 砂粒若干	底部片	線刻「□」 底部内面
2	土師器 坏	121×68×39 ロクロ成形 底部回転糸切りのち周辺ヘラ削り 体部ト溝ヘラ削り		橙褐 青	青	完形	
3	土師器 坏	一×一×40 ロクロ成形 体部下端ヘラ削り		橙褐 青	青	口縁～ 底部	墨書「竹野」 体部外面横位
4	須恵器 坏	一×一×39 ロクロ成形 体部下端ヘラ削り		灰 青	青	口縁～ 底部	
5	土師器 甕	(225)×一×(105) 口唇の内側をつまみ上げる		褐 青	青	口縁片	墨書「□」 胴部外面
6	土師器 甕	一×80×215 胴部縦位のヘラ磨き 底部 木葉痕		褐 青	青	胴部～ 底部	墨書「□」 胴部外面
7	石器 風石	長さ(58)×幅49×厚さ28 重量88.6g 半分程を欠くが砥石である いずれも滑らかで一部には弱い線条痕も 残される				1/3	凝灰岩

A167

検出地区 L6-85-1・2gにて検出した。

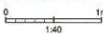
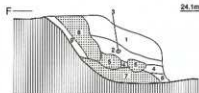
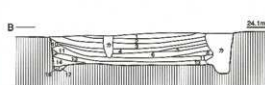
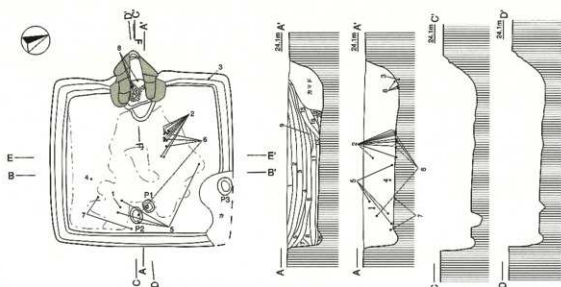
遺構 長軸3.74m×短軸3.63m×壁高0.69m、主軸方位はN-77°-Wを示している。平面形は横軸が長い隅丸方形である。東コーナー付近が攪乱によって損壊した住居跡である。床はハードロームの地床であり、一部ソフトロームの床も認められるところから、ハードローム上部を床面としているものである。竈前から出入口にかけての住居跡中央に、帯状に硬化面を検出した。支柱穴は検出できず、また、壁柱穴も確認できなかった。出入口に伴うピットが竈と対面する南東壁の中央部壁際に改替にともなうものが2基検出された。また、攪乱の下の周溝推定位置からピットが検出されている。周溝は竈袖下から、住居跡の壁下を巡っていた。

竈は北西壁の中央部に設けられていた。竈袖は粘土を主体として積み上げられ、内壁は赤化していた。竈ピット浅い掘込みで、左袖寄りに赤化した火床が検出された。煙道部は壁をやや深く掘込んでいた。また、赤化する部分も多かった。

覆土は暗褐色土を中心にした自然堆積であった。

遺物 出土した遺物は少なかった。しかも出土層は覆土中層から上層であった。3は壁際の床面と同じ高さで、斜めになって置かれた様に出土している。本住居跡からは、墨書土器が2点の出土であるが、1は「竹野」と判読している。7はA166の出土遺物と接合したものである。現在、詳細に検討中であるが、「梗□□」「清□/□□部/□」と判読できるようである。

所見 住居跡規模に比しても、遺物の出土は少ない遺構である。7の墨書土器であるが、高坏の脚部と坏との接合部付近に、逆位に記された長文の墨書土器である。梗が糧食をさすのか、人名なのか、その他の文字が判読できないため不明であるが、上谷遺跡でも高坏の墨書土器は初めての例であり、これにより長文の墨書は土師器甕、小型甕、坏の他に新たな器形が出土したわけであり、墨書を記す土器の器形を選ばないことが窺えるものである。



- | | | |
|------|--------|---------------------------|
| 1 層 | 暗褐色土 | 褐色土とほぼ均一に混じる |
| 2 層 | 暗褐色土 | 少量の褐色土とほぼ均一に混じる。ローム微粒少含 |
| 3 層 | 暗褐色土 | 少量の褐色土とほぼ均一に混じる。ローム微粒少含 |
| 4 層 | 暗褐色土 | 黒色土とほぼ均一に混じる。ローム微粒少含 |
| 5 層 | 暗褐色土 | 褐色土とほぼ均一に混じる。ロームの小粒数点含 |
| 6 層 | 暗褐色土 | ローム微粒少含 |
| 7 層 | 暗褐色土 | ローム微粒が混じる |
| 8 層 | 黒褐色土 | 少量の褐色土とほぼ均一に混じる。ロームの小粒数点含 |
| 9 層 | 暗褐色土 | 少量の黒褐色土混じる |
| 10 層 | 暗黄褐色土 | 濡ったロームと暗褐色土とほぼ均一に混じる |
| 11 層 | 暗褐色土 | 少量の褐色土とほぼ均一に混じる。ローム微粒やや多含 |
| 12 層 | 暗黄褐色土 | 濡ったロームと暗褐色土とほぼ均一に混じる |
| 13 層 | 暗褐色土 | 少量の褐色土とほぼ均一に混じる。ローム微粒混じる |
| 14 層 | 黒色土 | 少量の褐色土とほぼ均一に混じる。ローム微粒混じる |
| 15 層 | 暗黄褐色土 | 褐色土と濡った白色粘土が混じる |
| 16 層 | 暗黄褐色土 | 濡ったローム主体とした土。暗褐色土少し混じる |
| 17 層 | 暗黄褐色土 | 濡ったローム主体とした土。 |
| 18 層 | 灰色土 | 白色粘土主体とした土 |
| 19 層 | 暗灰褐色土 | 暗褐色土と少量の白色粘土が混じる |
| 20 層 | 暗褐色土 | |
| 1 層 | 灰色土 | 白色粘土ブロックと暗褐色土が粗く混じる |
| 2 層 | 暗灰褐色土 | 自然堆積層。暗褐色土と濡った白色粘土が混じる |
| 3 層 | 灰色土 | 白色粘土ブロック |
| 4 層 | 暗褐色土 | 少量の白色粘土がほぼ均一に混じる |
| 5 層 | 灰色土 | 白色粘土ブロック |
| 6 層 | 暗褐色土 | 暗褐色土主体 |
| 7 層 | 暗赤灰褐色土 | 火熱を受けて赤色化した白色粘土 |
| 8 層 | 灰色土 | 白色粘土ブロック |
| 9 層 | 暗灰褐色土 | 暗褐色土と白色粘土の混合 |

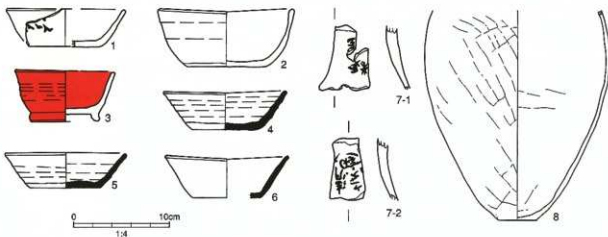


図113 A167

表47 A167遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	125×74×40 ロクロ成形	⑤褐 ⑥暗褐 青	青	1/4	黒書 「竹」「野」? 体部外面
2	土師器 坏	142×82×59 ロクロ成形 底部回転ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	⑤褐 ⑥黒褐 青	青	1/3	
3	土師器 高台付坏	105×台部径71×54 ロクロ成形 底部回転ヘラ切り	赤褐色 青	青	2/3	赤彩
4	須恵器 坏	130×68×39 ロクロ成形 底部静止ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	灰 青	青 砂粒若干	1/2	
5	須恵器 坏	128×74×38 ロクロ成形 底部回転ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	灰 青	青	2/3	
6	須恵器 坏	(130)×(72)×41 ロクロ成形 底部静止ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	灰 青	青	口縁～ 底部	
7	土師器 高坏	-×-×-	⑤赤褐色 ⑥淡褐 青	青	胸部片	黒書「横□」 「清□」異位 脚部外面 赤彩
8	土師器 葉	-×(40)×(222) 輪積最大径(196) 外面ヘラ削り 内面ナデ	橙褐 青	青 砂粒若干	1/4以下 胴部～	底部片

A168

検出地区 L-85-3g、L-95-1gにて検出した。

遺構 長軸2.85m×短軸2.80m×壁高0.32m、主軸方位はN-55°Eを示している。北と西コーナーに大きく攪乱が入る住居跡であるが、ほぼ方形に近い隅丸方形である。床はハードルーム上部の地床であり、一部ソフトルームと混在する。床の硬化面は、広い範囲で検出した。主柱穴はP4の1基を検出したが、壁柱穴も少なく4基であった。P3は出入口に伴うものと判断された。周溝は、竈壁以外に断続的に掘込まれるが、不明瞭であった。

竈は、北東壁中央に設けられていた。竈軸は粘土を主体として積み上げられ、内壁は赤変する程度であったが、竈ビットの坑底には赤化した火床を検出した。煙道は、壁を三角形に掘込んでいる。また、床に密着して、炭化粒と暗褐色土と混合した焼土を検出した。

覆土は床直上層が暗褐色土の人為的投入層であり、その後は暗褐色土の自然堆積層であった。

遺物 出土した遺物は少ないが、出土層は覆土中層から下層にかけてが中心であった。6・11・13は床面から出土しているが、11は置かれた状態、13は横倒しの状態で出土している。土師器の墨書土器が4点出土しているが、「竹野」の文字が確認できた。また、鉄器の穂摘具が2点出土している。

所見 住居廃絶後に、焼却行為を行った住居跡である。しかしその焼却はほぼ完全に焼却されたようで、「材」として殆ど残っておらず、「粒」として床面と6層に散っているだけであった。

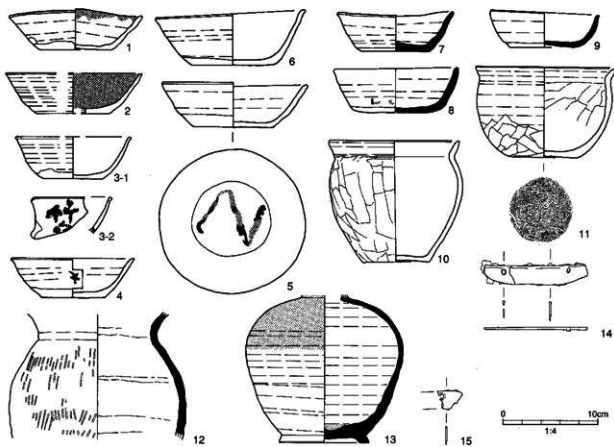
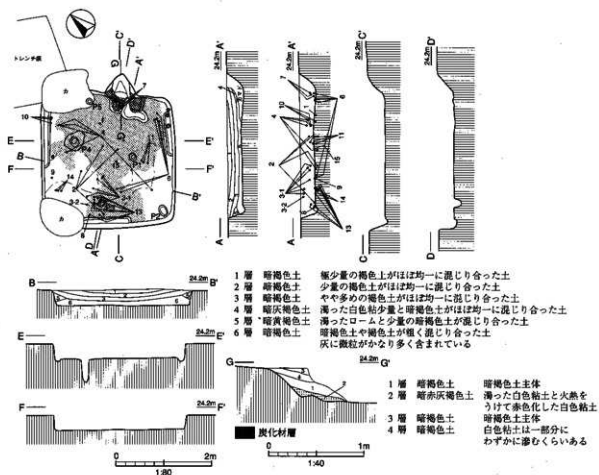


図114 A168

表48 A168遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	138×74×43 ロクロ成形 底部ヘラ切り 体部下端ヘラ削り 全体的に歪んでいる	褐 青	青	完形	内外面スス付着
2	土師器 坏	(142)×76×43 ロクロ成形 底部ヘラ切り 体部下端ヘラ削り 内面は丁寧な磨きを施し黒色処理している	赤黒褐 陶黒 青	青	1/5	内黒
3	土師器 坏	(120)×(64)×44 ロクロ成形 体部下端ヘラ削り 体部内面は磨きを施す 口縁をわずかに折り返す	褐 青	青	1/3	
3	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形	淡褐 青	青	口縁片	墨書「竹野」
4	土師器 坏	129×64×41 ロクロ成形 底部回転ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	淡褐 青	青	完形	墨書「四」 体部外面 内外面スス付着
5	土師器 坏	153×84×47 ロクロ成形 体部下端ヘラ削り	赤褐 陶黒 青	青	完形	墨書「四」 底部外面 内外面スス付着
6	土師器 坏	157×86×54 ロクロ成形 底部回転ヘラ切り 体部下端ヘラ削り 内面は磨きを施す	灰褐 青	青	完形	
7	須恵器 坏	123×70×39 ロクロ成形 底部静止ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	灰 青	青	完形	内面に炭付着 底部外面 スス付着
8	須恵器 坏	130×85×47 ロクロ成形 底部回転糸切りののち周辺ヘラ削り 体部下端ヘラ削り 体部直線的に立ち上がる	青灰 青	青	完形	墨書「口」 底部外面 外面スス付着
9	須恵器 坏	114×63×37 ロクロ成形 底部回転糸切りののち周辺ヘラ削り	橙褐 青	青	完形	
10	土師器 小型甕	138×70×130 輪積 口縁へやや外側に開く 外面 口縁部～椀ナデ 胴部ヘラ削り 内面 ナデ 底部～やや「上げ底」	橙褐 青	青 砂粒	1/4以下	
11	土師器 小型甕	147×70×96 ロクロ成形 回転糸切り 外面 胴部下半～ヘラ削り スス付着 内面 ヘラ削り 内面～底面にコゲ状付着物	褐 青	青	完形	
12	須恵器 甕	—×—×(133) 輪積 外面 タタキと思われる 器面の磨耗剥離が著しい 内面 ナデ	褐灰青 青	青 粗砂粒	1/4	
13	須恵器 甕	—×(94)×(157) 最大径(165) ロクロ成形 外面 頸部より胴上部にかけて自然釉がかかる 内面 底面に一部自然釉が認められる 底部 高台 口縁細長い頸部を有する甕と思われる	橙褐 青	青 砂粒少	頸部欠	
14	鉄器 櫛柄具	長さ(109)×幅20×厚さ2 重量18g 2孔を有する			略完形	
15	鉄器 櫛柄具	長さ(26)×幅19×厚さ1.5 重量1.9g 孔を有する			断面	

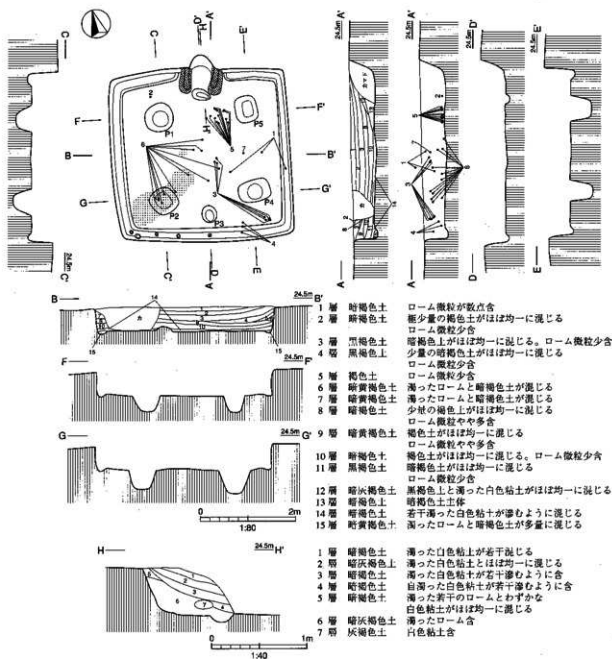


図115 A169

A169

検出地区 L7-5-1・2・3・4gにて検出した。

遺構 長軸3.77m×短軸3.68m×壁高0.52m、主軸方位はN-14°Eを示している。平面形は、横軸にやや長さを有する隅丸方形である。床はハードロームの地床であり、硬化面は検出されなかった。木根の攪乱による影響が、かなり見られた床であった。主柱穴はP1・P2・P4・P5の4基が検出され、壁柱穴は竈の対面の南壁下の周溝のみに5基確認された。P3は出入口のピットである。各ピットは、覆土から柱の引抜きと捉えられた。周溝は竈脇から、壁下を巡っていた。竈は住居跡北壁の中央に設けられ、竈袖は粘土と黒色土が混合したもので積み上げられていた。竈袖内壁は、若干赤化していた。竈ピットは認められず、赤化する部分がなく、火床は不明である。竈焚き口部分に小さなピットが掘込まれているが、若干凹凸があるが平坦な坑底である。焼土範囲なども確認できないので、本竈に伴うものかは不明である。煙道は壁を掘込んでつくるが、掘込みの横幅は小さかった。南西コーナーから住居跡中央に向

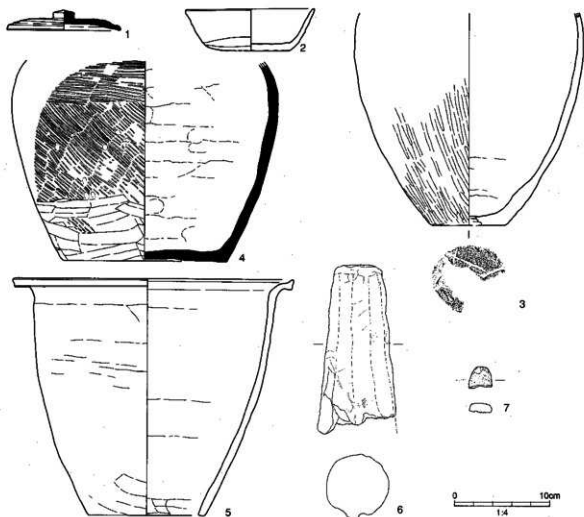


図116 A169 (2)

かって、暗褐色土と粘土が混合した粘土分布を検出した。住居跡中央では床面に達しているが、壁際はかなり床から浮いている状態であった。

覆土は暗褐色土を主体とした自然堆積であるが、上層では黒色土となっている。

遺物 出土した遺物は少なく、特に住居跡中央から竈側での出土は少なかった。2は床から少し浮いて出土し、置かれた様な状態であった。4は覆土下層の壁際から出土している。

所見 南西コーナーからの粘土分布は、その堆積状況から住居廃絶後、暫くたってからの人為的な投入であり、直接本住居跡に関わるものではないと捉えた。また、本調査区において、主柱穴が4基と出入口施設のピット、周溝の状態と、いわば数少ない典型的な住居跡の例であった。

遺物は少なく、実測可能遺物は壺が主体となり、この点で他の住居跡と異なるかもしれない。

表49 A169遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 壺 外面ヘラ削り	120×-×21 ロクロ成形	暗灰 青	青	1/4	
2	土師器 坏	134×80×44 ロクロ成形	㊦黒褐 ㊧暗褐 青	青	1/2	外面スス付着

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
3	土師器 壺	一×(78)×(225) 外面 口縁部～ナデ 胴上半～縦位ヘラ磨き(ヘラ削りの強い磨き) 内面 ナデ 輪積み痕 指痕痕が見られる	橙褐色	粗 粗砂粒多	1/4 胴部～ 底部	外面 コゲ状付着物 底部木葉痕
4	須恵器 壺	一×(172)×(214) 輪積 外面 平行タタキ 下端ヘラ削り 指痕痕が見られる 内面 ナデ 輪積み痕 指痕痕が見られる	青灰 青	粗 粗砂粒多	1/4	
5	土師器 瓶	295×120×252 孔径107 輪積 外面 口縁部～横ナデ 胴部～ナデ 下端 斜位ヘラ削り 内面 ナデ 胴下端ヘラ削り	橙褐色	骨粗砂粒 雲母多	3/4	底部穿孔の瓶
6	土製品 支脚	残存長179 残存幅43～80 円錐形を呈し、ヘラによるナデ削り調整が施される	橙褐色	粗 砂粒多	略完形	下部欠損
7	石器 礫石	長さ23×幅24×厚さ10 重量1.3g 大きく破損しているが全体の形状は扁平な随門形を 呈していたものと思われ残存部には、弱い磨痕も認められる			断片	礫石

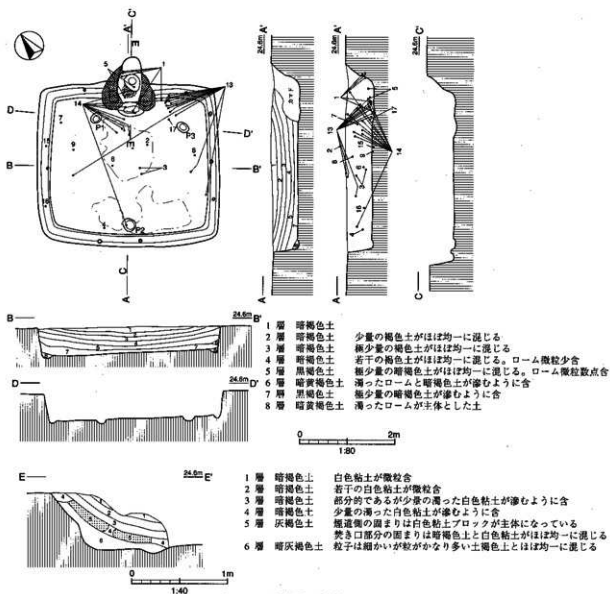


図117 A170

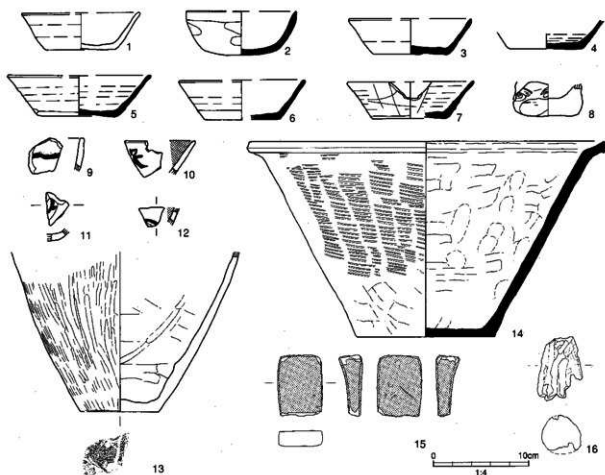


図118 A170 (2)

A170

検出地区 L7-4-2・4g、L7-5-3gにて検出した。

遺構 長軸3.82m×短軸3.48m×壁高0.57m、主軸方位はN-40°Eを示している。平面形は、横軸が大きい隅丸方形である。床面はハードロームの地床であり、竈前を中心に硬化面を検出した。主柱穴はP1・P3の2基を検出し、壁柱穴は8基確認した。覆土から、柱はP2も含めて、引抜かれていると捉えられた。P2は、出入口の施設に伴うピットである。周溝は、竈袖下から全周していた。

竈は北西壁中央に設けられ、壁を掘込んだ煙道部はやや奥行きが深いものであった。竈袖は黒色土と粘土が混合したもので積み上げており竈袖内壁は赤化していた。竈焚き口部にピットが浅く掘込まれ、竈ピットへと繋がっている。竈ピットは凹凸ある坑底で、坑底中央が火床のため赤化していた。

なお、覆土は黒褐色土と暗褐色土を中心とした自然堆積であった。

遺物 比較的多く遺物が出土した住居跡である。しかし出土層は覆土中層から上層が主体であり、床から浮いたものが多かった。墨書土器はいずれも破片であり、判読不明であるが4点の出土をみている。14の須恵器甕は底部から斜めに直線的に立ち上がるものであった。

所見 攪乱も被らず、自然堆積によって埋没した堅穴住居跡である。本住居跡周辺にも人為的な投入土によって埋没した住居跡が多く、本地区の住居跡の埋没過程を知る上で、貴重な例となると思われる。14の須恵器甕であるが、上谷遺跡のみではなく、八千代市域でも横のタタキ目の例は少なく、また、胴部の曲線的な立ち上がりも少ない例であり、他地域からの搬入品として捉えたい。類例の増加を待ち、更に検討すべきであろう。

表50 A170遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 炭成	胎土	遺存	備考
1	土師器 杯	(124)×(72)×44 ロクロ成形 体部下端ヘラ削り	淡褐色	普	1/3	外面スス付着
2	須恵器 杯	(110)×26×46 ロクロ成形 底部ヘラ削り調整で丸底さみ 体部は部分的に横位のヘラ削り 底部～体部へ緩やかに立ち上がってゆく	褐色	普		口縁～ 底部
3	須恵器 杯	(130)×79×38 ロクロ成形	青灰 普	普		口縁～ 底部
4	須恵器 杯	(150)×80×(15) ロクロ成形 底部周辺ヘラ削り	灰色 普	普		底部
5	須恵器 杯	(150)×(80)×44 ロクロ成形 底部静止ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	灰色 普	普 砂粒若干	1/2	
6	須恵器 杯	(134)×(80)×42 ロクロ成形 底部静止ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	灰 普	普	1/4	
7	須恵器 杯	(134)×(80)×39 ロクロ成形 底部静止ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	灰 普	普 雲母若干		口縁～ 底部
8	土製品 手捏土器	一×70×(35) 手捏 ミニチュア土器としてはやや大型である 手捏で粗く立ち上げているが 土製品の可能性もある	褐色	普	1/3	
9	土師器 杯	一×一×一 ロクロ成形	褐色	普		口縁片 墨書「□」 体部外面
10	土師器 杯	一×一×一 ロクロ成形 内面丁寧な磨きを施し、黒色処理をする	褐色 黒 普	普		口縁片 墨書「□」 体部外面 内黒
11	土師器 杯	一×一×一 ロクロ成形	淡褐色	普		底部片 墨書「□」 底部外面
12	土師器 杯	一×一×一 ロクロ成形 内面丁寧な磨きを施し、黒色処理をする	褐色 黒 普	普		体部片 墨書「□」 体部外面 内黒
13	土師器 壺	一×(82)×(170) 輪積 外面 ヘラ磨き(削り状の) 内面 ナデ 下端ヘラ削り 胴部 内面下端に稜をもつ	明褐色 普	粗 粗砂粒多	1/4	内外面スス付着 底部 木葉痕
14	須恵器 鉢	(372)×146×209 輪積 外面 平行タタキ 下端ヘラ削り 内面 ナデ 指頭圧痕あり	青灰 普	普 粗砂粒 雲母多	1/4	
15	石器 砥石	長さ(65)×幅47×厚さ25 重量93.6g 4砥面、半分ほど欠損 内面はきわめて滑らかであるが、 側面の使用痕はやや不明痕			1/2	凝灰石
16	土製品 支脚	残存長(63)×残存幅(31～46) 円錐状を呈すると思われる 依存状態が悪く残存面は一部ヘラによるナデ調整が施される	褐色 普	普 砂粒多	1/4	
17	鉄滓	長さ98×幅112×厚さ56 重量826.5g 色調 赤褐色 砂粒を含む				断片 未掲示

A171

検出地区 L7-3-2g, L7-4-1・3gにて検出した。

遺構 長軸3.85m×短軸3.83m×壁高0.54m、主軸方位はN-52°Eを示している。平面形は横軸が僅かに長い隅丸方形である。床はハードローム上部とする地床であり、一部ソフトロームも認められるものである。竈前から出入口手前まで、硬化面を検出した。主柱穴は検出できず、壁柱穴は竈に対面する西壁下の周溝内に5基確認した。床には5基のピットを検出したが、覆土からすべて引抜かれていると捉えられた。出入口ピットを含めその性格は配列状、やや不明瞭であった。周溝は、竈右側の東コーナーで途切れるが、左袖下から東コーナーまで壁下を巡っている。

竈は北東壁中央から若干東コーナー寄りに設けられており、壁を掘込んだ煙道部は段差を持って浅く奥へと掘込まれていた。竈袖は粘土と黒色土が混合したもので積み上げられ、竈袖の内壁は一部赤化し

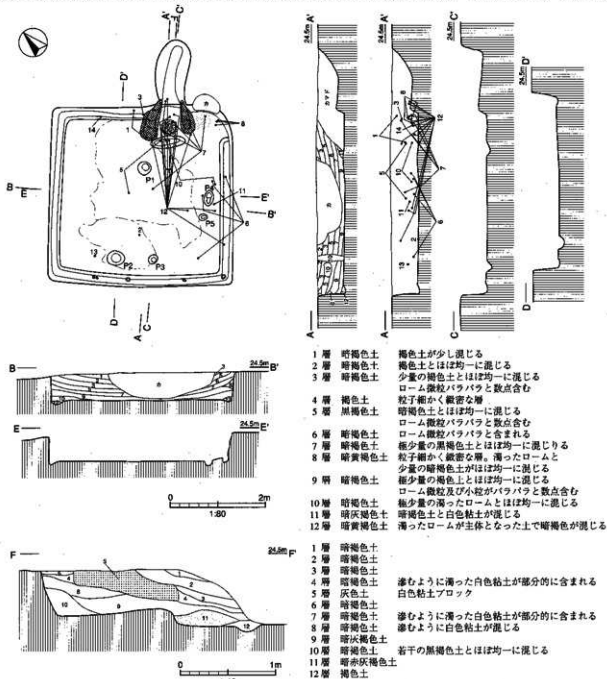


図119 A171

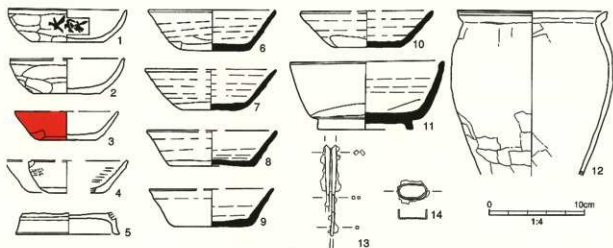


図120 A171 (2)

ていた。竈ピットはなく床面とほぼ同じ高さで竈内に移行するが、火床部分は凹凸を有し赤化していた。竈焚き口部にピットが溝状に掘込まれていた。坑底は若干の凹凸があるものの平坦なものであった。壁上の煙道部は、細長く煙道部先端にやや下るものである。また、竈右袖壁には暗褐色土と混合した焼土が、滲むように分布していた。

覆土は暗褐色土を主体とした自然堆積であるが、木根による攪乱を大きく被るものであった。

遺物 出土した遺物は多くはなかった。出土層の中心は、覆土中層から上層であり、床面からの出土は殆ど見られなかった。

2は床から少し浮いて、斜めに傾く様な状態で出土している。8覆土下層の出土で壁際に斜めとなっており、11は覆土中層から置かれる様な状態で出土している。墨書土器は1点出土しているが、「大家」と記されていた。

所見 床に検出されたピットのうち柱穴となるものもあるだろうが、柱穴の配置上では明確にしえなかった。P1・P3・P4とすれば対角線上に配置されP2が出入口施設に伴うピットとなろうが、P2の平面規模がP3より大きく、出入口ピットがP2・P3のどちらなのかが問題となろう。

「大家」の墨書土器であるが、この文字については多くの遺跡から出土しており、上谷遺跡及び他の遺跡例と比較検討すべきかもしれない。

表51 A171遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	124×72×35 底面ヘラ切り 体部全面ヘラ削り調整	ロクロ成形 口縁ナブ調整 内面は丁寧な磨きを施す やや内湾しながら立ち上がる	褐色	普通	略完形	墨書「大家」 体外横位 (口縁部)
2	土師器 坏	(120)×70×37 底面静とヘラ切り 体部全面ヘラ削り	ロクロ成形 口縁ナブ調整 体部の境に襷を作り直立する やや内湾しながら立ち上がる	褐色	普通	1/4	
3	土師器 坏	(110)×(60)×30 底部下端回転ヘラ切り 体部下端一部ヘラ削り	ロクロ成形	⑤褐色 褐色	普通	口縁～ 底部	赤彩(体外外面)
4	土師器 坏	(110)×(60)×30 底面ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	ロクロ成形	淡褐色	普通	口縁～ 底部	墨書「□□」 体外外面

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 或 形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
5	土師器 高台付坏	一×台部径(109)×(23) ロクロ成形 底部外面にスス付着	褐 青	青	高台 部片	
6	須恵器 坏	135×75×43 ロクロ成形 底部回転ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	灰褐 青	青 砂粒若干	略完形	
7	須恵器 坏	(138)×60×43 ロクロ成形 底部静止ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	青灰 青	青 砂粒若干	1/4	
8	須恵器 坏	(136)×(89)×37 ロクロ成形 底部回転ヘラ削り	灰 青	青 砂粒若干	1/3	
9	須恵器 坏	(130)×(84)×40 ロクロ成形 底部回転ヘラ切り	灰 青	青	口縁～ 底部	
10	須恵器 坏	(140)×(70)×38 ロクロ成形 底部静止ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	青灰 青	青 砂粒若干	口縁～ 底部	
11	須恵器 高台付坏	163×台部径100×71 ロクロ成形 底部回転ヘラ切りのちヘラ削り 切り難した後、高台部を貼り付け、ナデ調整 体部下端ナデ調整 体部は直線的に立ち上がる	暗灰 良	緻密	完形	体部内外面とも 一部にスス付着
12	土師器 甕	(158)××(174) 輪積 外面 口縁部～横ナデ 胴上半～ナデ 下半～ヘラ削り 内面 口縁部～横ナデ 胴半ナデ 最大径(170)	褐 青	青 粗砂粒多	1/4	外面少量 スス付着
13	鉄器 不明	長さ(96)×幅上半部各5中半部3×厚さ上半部5～6中半部2.5～3 2点の棒状鉄器が錆で付着したもの			断片	
14	鉄器 不明	長さ(30)×幅17×厚さ1.5 重量7.7g			断片	

A172

検出地区 L6-94-3gにて検出した。

遺構 長軸2.81m×短軸2.68m×壁高0.35m、主軸方位はN-27°-Eを示している。平面形は横軸がやや長い隅丸方形である。床はハードロームの地床であり、全体的に踏固められていたが、硬化面は特に検出されなかった。住居中央の床は、周囲より若干凹んでいるものである。主柱穴は、北西コーナー近くにP1のみ検出されたが、壁柱穴は確認できなかった。P2は出入口に伴うビットである。各ビットは覆土から、柱等が引抜かれていたものと捉えられた。周溝は、竈袖下から各壁下を巡っていた。

竈は北東壁中央からやや東コーナー寄りに設けられ、竈袖の遺存は両袖でやや異なり、左袖は長く右袖は横に広がるように残っていた。竈袖は粘土を主体として積み上げられ、竈内壁は赤化していた。竈ビットは床より一段下がるもので坑底は平坦であるが、赤化している所はなかった。煙道部は、壁を横幅よりやや奥に長く掘込んでいた。

竈中央から住居跡北コーナー近くまで幅を持って白色粘土が、住居跡中央へ向かって流れ込んでいた。住居跡中央では粘土は床面まで下がっていた。覆土は基本的に暗褐色土を主体とした自然堆積であるが、9層は投入土であった。

遺物 出土した遺物は少なく、平面的には住居跡中央から東側に偏在していた。14は、壁際の床面に伏せた様に出土している。

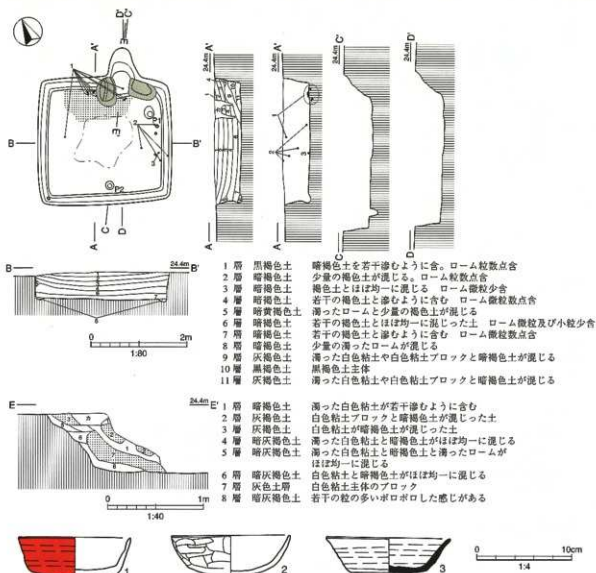


図121 A172

所見 やや小型の住居跡であるが、遺存状況はしっかりとした遺構である。覆土は竈付近の一部に粘土等の投入土が認められたものの、本遺跡では例の少ない整然としたレンズ状の堆積状況を示していた。床面状態や遺存状況から長期の使用は捉えられなかった。

表52 A172遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	116×89×42 ロクロ成形 底部静止ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	橙褐色 普	普	3/4	赤彩 (内外面とも部分的に残る)
2	土師器 坏	124×90×43 金面手持ちヘラ削り	淡褐色 普	普	1/2	
3	須恵器 坏	130×80×39 ロクロ成形 底部静止ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	青灰 普	普 砂粒若干	略完形	

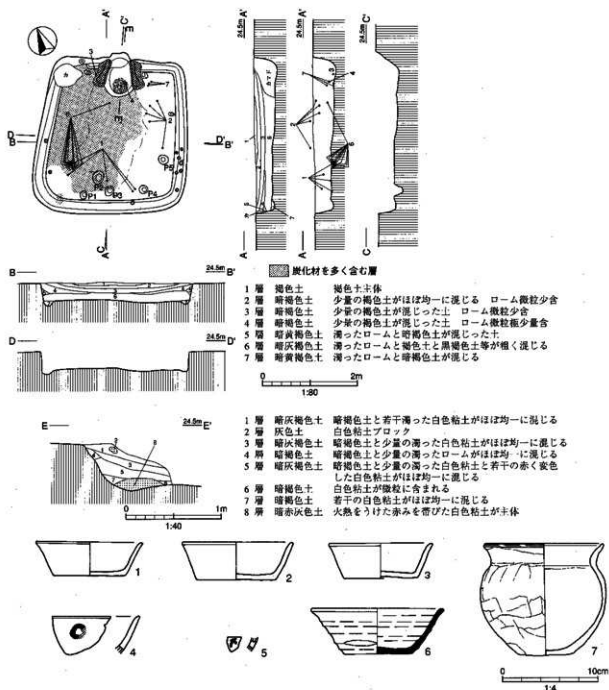


図122 A173

A173

検出地区 L7-3-1gにて検出した。

遺構 長軸3.26m×短軸3.11m×壁高0.42m、主軸方位はN-27°Eを示している。平面形は、やや西コーナーに長い不整な隅丸方である。床はハードロームの地床であり、全体的に踏固められた床であったが、住居跡中央に硬化面を検出した。主柱穴は不明瞭であるが、壁柱穴を周溝内及び壁に11基確認した。床からはピットを7基検出しているが、柱穴とは明瞭にはできなかった。また、出入口施設に伴うピットもP2・P3なのか捉えにくいものであったが、P3と捉えている。周溝は全周はせず、北コーナーが攪乱を被るため不明となるが、それぞれ竈袖下から巡る周溝は、北コーナーで途切れている。

竈は北東壁中央に設けられ、竈袖は「ハ」の字状にひろくものである。竈袖は粘土と黒色土が混合したもので積み上げられ、竈袖内壁は若干赤化する程度であった。竈ピットはやや広く掘込まれ、坑底の

床側に寄って強く赤化した火床を検出した。煙道は壁を浅く掘込んだものであった。

住居跡中央から西側には炭化材と暗褐色土や混合した焼土が床に密着して検出されている。大きな炭化材はなかった。

覆土は焼却行為後の暗灰褐色土の投入後、暗褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺物 出土した遺物は、住居跡としては極めて少なかった。そして少ない遺物出土であるが、出土層は覆土中層から上層が殆どであった。3は、竈左袖脇の床面から50cmほど浮いて、竈崩落土の上に置かれた様に出土している。また、墨書土器は破片であるが2点出土していた。

所見 住居廃絶後に、不用材の焼却行為と埋戻しを行った堅穴住居跡である。

なお、床面から検出したピットであるが、竈両脇にそれぞれピットがあり、それに対応するようにP1・P4が検出されている。それぞれ小さなピットであるが、この4基が主柱穴ではないが、支柱穴の可能性があると考えている。そして竈との対面する位置から、P3を出入口のピットと捉えたものである。

表53 A173遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	110×78×35 ロクロ成形 体部が直線的に立ち上がる	橙褐 普	普	完形	
2	土師器 坏	118×82×40 ロクロ成形 底部回転ヘラ切りのち、周辺ヘラ削り 体部は直線的に立ち上がる	橙褐 普	普	略完形	
3	土師器 坏	110×82×40 ロクロ成形 底部回転ヘラ切り 体部は直線的に立ち上がる	黒褐 普	普	略完形	
4	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	橙褐 普	普	口縁片	墨書「□」 体部外面
5	土師器 坏	-×-×-	褐 普	普	体部片	墨書「因?」 体部外面
6	須恵器 坏	140×70×49 ロクロ成形 底部静止ヘラ切り体部下端ヘラ削り	灰 普	普 砂粒若干	略完形	
7	土師器 小型甕	125×58×120 最大径132 輪積み 口縁受け口状頸部「く」の字状 外面 口縁部～横ナデ 胴部～ヘラ削り 内面 口縁部～横ナデ 胴部～ナデ 胴部上部に彫り込みをもつ	暗褐 普	普 砂粒少 蛭母	完形	

A174

検出地区 L6-83-2・3・4gにて検出した。

遺構 長軸2.79m×短軸2.61m×壁高0.36m、主軸方位はN-54°-Eを示している。平面形は、横軸が僅かながら長くなる歪な隅丸方形である。床はハードロームの地床であり、竈から南コーナーにかけて硬化面を検出した。床から壁の立ち上がりは、やや丸みを持って立ち上がっていた。主柱穴は検出されず、壁際等に7基の壁柱穴を確認した。出入口施設に伴うピットの検出もなかった。

竈は北東壁中央に設けられ、竈袖は粘土に黒色土が混合したもので積み上げられていた。焚き口にピットが検出されたが火床に伴うピットではなく、竈袖の間に火熱痕を認めたが赤化はしていなかった。煙道部は壁上に段差を有して、奥行きのあるものとして長く掘込まれていた。竈前には炭化粒と焼土が

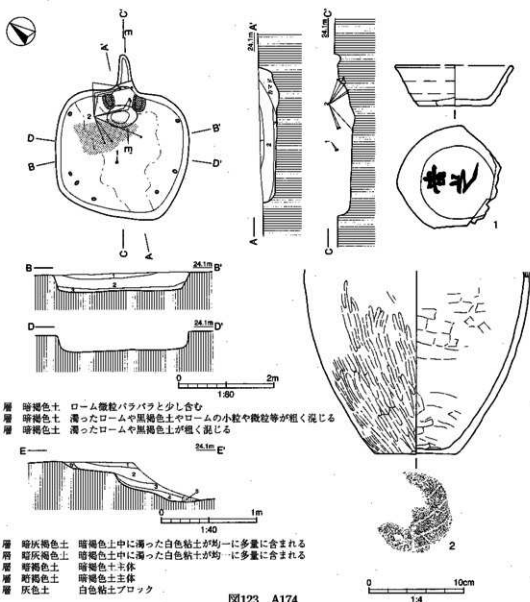


図123 A174

表54 A174遺物観察表

(単位mm)

No	種別形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(126)×78×42 ロクロ成形 底部静止糸切りののら周辺ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	暗赤 普	普	1/4	墨書「吉足」 底部外面
2	土師器 甕	一×(85)×(195) 輪積 最大径(238) 外面 ヘラ磨き(削り状の) 内面 ナデ下端ヘラ削り	暗赤褐 普	粗 粗砂粒多	1/4 以下	底部 木葉痕

混じり合ったものが捉えられたが、炭化材は検出されなかった。また、覆土であるが、暗褐色土主体とした自然堆積であった。

遺物 出土する遺物が殆どない住居跡である。1は床から30cm程浮いて出土している墨書土器である。「吉足」と墨書されている。

所見 墨書された「吉足」を、人名として捉えている。この2文字のみであり、前後に繋がらないものであるが、所有者を表すのか、祈願の土器であるかは判然としない。

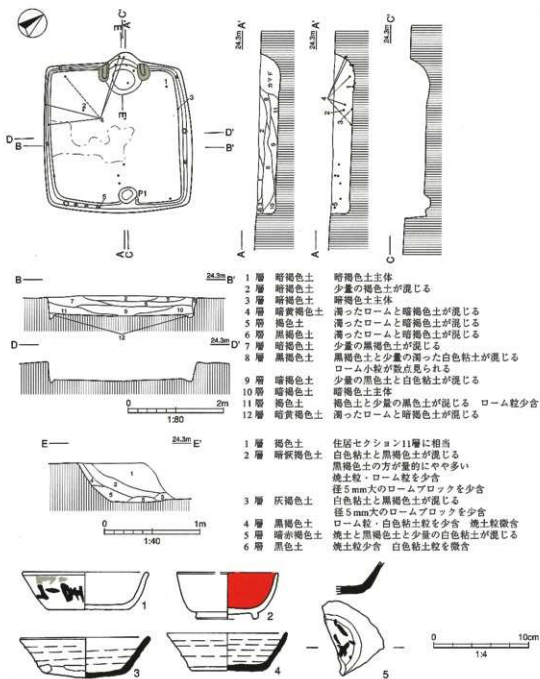


図124 A175

A175

検出地区 L6-92-1・2gにて検出した。

遺構 長軸3.18m×短軸3.10m×壁高0.43m、主軸方位はN-50°-Wを示している。平面形は隅丸方形である。床はハードロームの上部の地床であり、一部ソフトロームが混在している。床全体に硬化面を検出したが、住居跡中央から西壁中央にかけて細く帯状に軟弱化した床面も認める。主柱穴は検出されなかったが、周溝内に10基の壁柱穴を確認した。P1は出入口施設に伴うものである。周溝は、竈袖下から全周している。竈は北西壁中央に設けられ、竈袖は粘土主体で積み上げられており、袖の内壁は部分的に赤化していた。竈ピットは浅く皿状であり、坑底に火熱痕はあるものの赤化はしていなかった。煙道部は、壁を浅く掘込んでいた。

覆土は、様々な色調と包含物の人為的な堆積層であった。

竈は北西壁中央に設けられ、竈袖は粘土主体で積み上げられており、袖の内壁は部分的に赤化していた。竈ピットは浅く皿状であり、坑底に火熱痕はあるものの赤化はしていなかった。煙道部は、壁を浅く掘込んでいた。覆土は、様々な色調と包含物の人為的な堆積層であった。

遺物 出土遺物は殆どなかった。1・3は床面から、2は覆土中層の出土であった。墨書土器は2点出土している。

所見 堅穴住居跡廃絶後に、人為的な投入土によって埋戻された遺構である。床面にはまとまった焼土も確認されておらず、住居廃絶後の焼却行為は本住居跡では行われていないと判断している。住居廃絶後に「穴」としての面を許さず、平面をつくる必要があったと考えられるが、その目的までは判然としない。上谷遺跡Ⅱ地区においてはこのような例がやや多かったが、本地区においては初めての例であった。全整理を進めていく中で、この傾向を明らかにしていきたい。また、出土遺物はその出土量は確かに少ないが、実測可能な壺の出土も坏に比べて少なかった。このため図示はできなかったが、人為的な投入と遺物の少なさが関連するのかとも考えている。

なお、1の墨書土器であるが、出土状況から本住居跡に伴うものと判断している。

表55 A175遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	132×76×45 ロクロ成形 底部静止ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	黒褐色	普	略完形	墨書「四」 体部外面横位
2	土師器 高台付坏	106×66×49 ロクロ成形 体部は直線的に立ち上がる	赤褐色	普	2/3	内面赤彩
3	須恵器 坏	126×76×40 ロクロ成形 底部静止ヘラ切り □縁は歪みを生じ楕円形となる 体部下端ヘラ削り	青灰	普	完形	
4	須恵器 坏	137×86×43 ロクロ成形 底部静止ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	青灰	普 砂粒若干	略完形	
5	須恵器 坏	—×—×(33) ロクロ成形 底部回転糸切りののち周辺ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	灰	普	底部片	墨書「口」 底部外面

A176

検出地区 L6-76-3gにて検出した。

遺構 長軸2.90m×短軸2.80m×壁高0.20m、主軸方位はN-78°-Wを示している。平面形は横軸がやや長い隅丸方形である。大きな擾乱が入り、住居の壁と床の一部が損壊する住居跡である。

床はハードロームの上部の地床であり、ソフトロームが一部床面となる所もあった。竈前から、帯状に出入口付近まで硬化面を検出した。主柱穴は1基検出し、周溝内に7基確認した。竈に対面する東壁中央際に出入口のピットを検出している。周溝は、竈袖下から全周していた。覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積である。床面に密着して、3カ所点在する炭化材を検出した。焼土は床面に散布していたが、範囲として捉えられなかった。覆土は床直上の5層が焼却行為に伴う人為的投入土であり、その後は自然堆積であった。

遺物 遺物の出土は少ないが、竈周辺に多い傾向であった。14は流れ込みである。

所見 住居跡廃絶後、若干の焼却行為が行われた様であるが、炭化材や焼土の検出が少ないこと

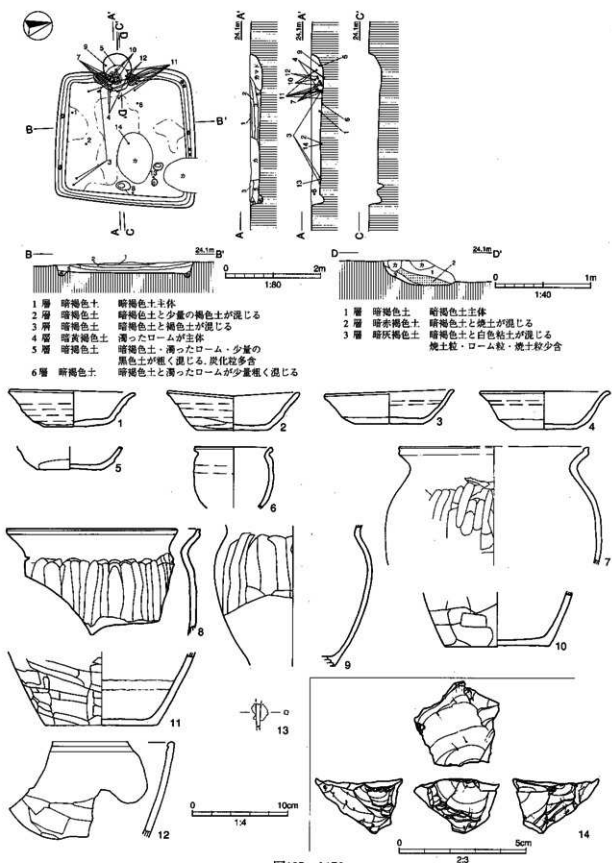


図125 A176

から、その行為は小規模なものであると考えている。また、その小さな焼却行為に対しての人為的な投入土は、焼却行為が目的というより、土砂の投入が主目的ではなかったかと窺われる住居跡の覆土堆積であった。

表56 A176遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	131×60×38 ロクロ成形 底部回転ヘラ切り 体部下端ヘラ削り 全体的に歪んだ器形となる。	褐 音	普	完形	
2	土師器 坏	137×72×36 ロクロ成形 底部ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	黒褐 音	普	完形	
3	土師器 坏	135×72×34 ロクロ成形 底部回転ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	暗褐 音	普	略完形	
4	土師器 坏	134×64×40 ロクロ成形 底部ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	褐 音	普	1/4	
5	土師器 坏	一×69×(25) ロクロ成形 底部回転糸切りのち周辺ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	橙褐 音	普	底部片	
6	土師器 小型壺	(82)×一×(65) ロクロ成形 胴部下半ヘラ削り	褐 音	普	口縁～ 胴部	
7	土師器 壺	(200)×一×(125) ロクロ成形 口唇をつまみ上げる(常総型)口縁～胴部ナデ 胴部上半 縦位の細やかなヘラ削り	黒褐 音	普	口縁～ 胴部	
8	土師器 壺	一×一×(113) ロクロ成形 口縁～胴部ナデ 胴部 縦位のヘラ削り	暗褐 音	普	口縁～ 胴部	
9	土師器 小型壺	一×一×(149) ロクロ成形 胴部上半 縦位のヘラ削り 胴部下半 横位のヘラ削り 器面の剥離が著しい	褐 音	普	胴部	
10	土師器 壺	一×(118)×(78) ロクロ成形 底部停止ヘラ切り 胴部下半 横位のヘラ削り	黒褐 音	普	胴部～ 底部	
11	土師器 壺	一×110×(57) ロクロ成形 胴部下半 横位のヘラ削り	黒褐 音	普	胴部～ 底部	
12	土師器 壺	一×一×(100) ロクロ成形 口縁ナデ 胴部 横位のヘラ削り	暗褐 音	普	口縁～ 胴部	
13	鉄器 角筥	長軸24.5×幅4×厚さ4 重量3.3g				断片
14	石器 石核	長軸24×最大幅33 やや剥片の取り方の不明瞭な石核				黒曜石

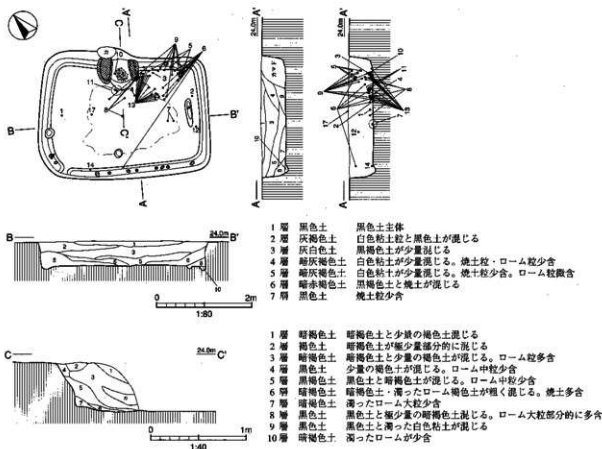


図126 A177

A177

検出地区 L6-65-gにて検出した。

遺構 長軸3.54m×短軸2.58m×壁高0.50m、主軸方位はN-39°Eを示している。平面形は、横軸が長い隅丸方形である。床はハードローム上部の地床であり、このため一部ソフトロームの床となっている。主柱穴は不明であるが、床にピットは2基検出されたが、柱穴とは捉えきれなかった。南西壁周溝内には壁柱穴が10基確認された。周溝は、竈袖下から壁下を全周していた。

竈は北東壁中央に設けられており、攪乱によって不明瞭な点もあるが、極めて浅く壁を掘込んで煙道部としている。竈袖は粘土を主体として横み上げられており、袖内壁は赤化していた。竈ピットは斜めに掘込まれ、坑底中央に赤化した火床が検出された。

覆土はロームの包含を主として分層したが、暗褐色土と黒色土を中心とした人為的な投入土であった。また、一気に埋めている様子が窺えた覆土でもあった。

遺物 出土した遺物多くなかったが、覆土下層から上層にかけての出土であり、人為的な投入土と共に入り込んだものと捉えている。2は「竹野」と記された墨書土器である。6・7は「田」の字を記していると思われる、15～17は同一個体であり、馬具のハミの一部と思われる。

所見 住居跡廃絶後に、一気に埋め戻された遺構であると捉えられた。そして投入土と共に、遺物の多くが入ったものと捉えている。床面には焼土や炭化材はなく、焼却行為を伴ってはいないが、これはA175と類似するものであった。墨書土器は「竹野」を出土しているが、Ⅲ地区にやや多い墨書の文字であり、覆土と考え合わせると、この文字の用途が失われたための廃棄であろうか。

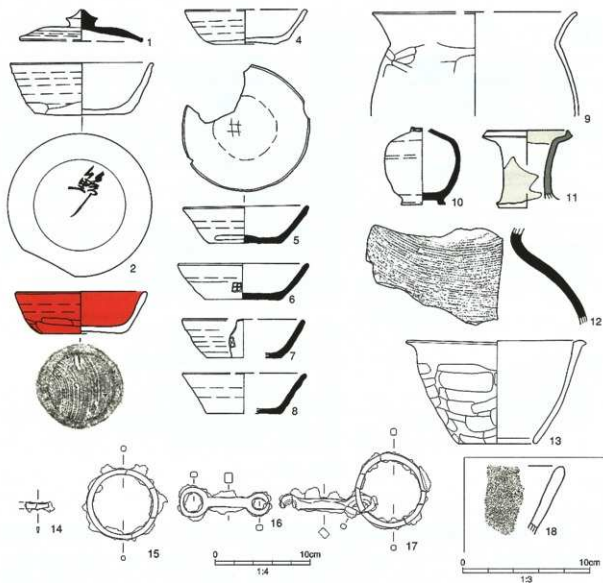


図127 A177 (2)

表57 A177遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 蓋	(130)×-×33 ロクロ成形 把手は宝珠形	灰 青	普 砂粒若干	1/6	
2	土師器 坏	150×98×56 ロクロ成形 底部 静止ヘラ切り 体部 下端ヘラケズリ	橙褐 青	普	4/5	罫書「竹野」 底部外面
3	土師器 坏	138×85×44 ロクロ成形 底部回転糸切りののち周辺ヘラケズリ 体部下端ヘラケズリ	赤褐 青	普	4/5	赤彩
4	土師器 坏	(130)×65×37 ロクロ成形 底部回転糸切りののち周辺ヘラケズリ 体部下端ヘラケズリ	褐 青	普	1/4	
5	須恵器 坏	133×77×39 ロクロ成形 体部下半に部分的にヘラケズリ	灰 青	普 雲母若干	3/4	線刻「井」 底部内面

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
6	須恵器 坏	140×80×38 ロクロ成形 底部ヘラケズリ調整	灰褐色 青	青 砂粒若干 雲母若干	略完形	線刻「田」 体部外面
7	須恵器 坏	(128)×77×39 ロクロ成形 底部回転ヘラ切り 体部下端ヘラケズリ	灰青	青	1/2	線刻「田」 体部外面
8	須恵器 坏	(130)×80×42 ロクロ成形	灰青	青	口縁～ 底部	
9	土師器 甕	(215)×-×(110) ロクロ成形 口縁～頸部ナデ 胴部横位のヘラケズリ	褐色 青	青	口縁～ 胴部	
10	須恵器 長頸壺	-×台部径47×(81) ロクロ成形 胴部中央やや上に最大径をもつ	灰 良	緻密	胴部～ 底部	
11	陶器 長頸壺	-×-×(82) ロクロ成形 口縁が旧尚ぎみに立ち上がる	褐色 灰	緻密	胴部	自然軸
12	須恵器 甕	-×-×- 頸部ナデ 胴部横位のタタキ目一部器面の剥離あり	灰青	青	胴部～ 頸部	
13	土師器 甌	190×83×107 ロクロ成形 底部から直線的に立ち上がり胴部でわずかにぐれ口縁は ゆるやかに外反する。口縁～頸部はナデ、胴部は横位のヘラケズリ	褐色 青	青	完形	
14	鉄器 刀子	長31×幅6×厚さ2 重量2.2g			刃部片	
15	鉄器 馬具	径24.5×厚さ4 重量33g 馬具の銜の部と思われる。16と連結される				16.17と同一
16	鉄器 馬具	長(259)×厚さ5～10 重量55.9g 馬具の銜の部と思われる。15.17と連結される			略完形	15.17と同一
17	鉄器 馬具	総長160 重量85.2g 環形25×厚さ5 16と連結される 連結部 厚さ10				15.16と同一

A178

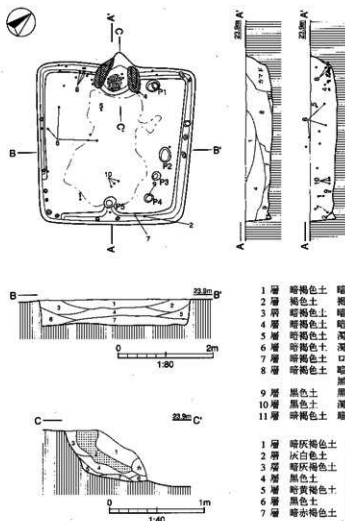
検出地区 L6-65-3gL6-75-1gにて検出した。

遺構 長軸3.37m×短軸3.20m×壁高0.54m、主軸方位はN-48°-Wを示している。平面形は隅丸方形である。床面はハードルームの地床であり、竈前から出入口にかけてアメーバ状に硬化面を検出した。床面に6基のピットを検出しているが、主柱穴を明瞭にすることができなかった。周溝内及び壁下に、13基の壁柱穴を確認した。出入口に伴うピットも柱穴と関わり不明確であるが、竈と対面する南東壁中央脇と考えられた。周溝は、竈袖下から壁下を全周するものであった。

竈は北西壁中央に設けられ、竈袖は粘土を主体として積み上げられていた。袖の内壁は、部分的に赤化していた。竈ピットは皿状に浅く掘込まれ、坑底の床寄りに赤化した火床を検出した。煙道部は壁を掘込んでつくっていた。

覆土はロームの包含と色調で捉えたが、すべてが人為的投入土であった。

遺物 出土した遺物は少なく、点在する程度であった。4は竈右前の床の僅かに高い位置におい



- | | | |
|-----|------|-------------------------------------|
| 1層 | 暗褐色土 | 暗褐色土と少量の褐色土が混じる。ローム中粒多含 |
| 2層 | 褐色土 | 褐色土と極少量の暗褐色土が混じる。ローム中粒少含 |
| 3層 | 暗褐色土 | 暗褐色土と少量の褐色土が混じる。ローム中粒多含 |
| 4層 | 暗褐色土 | 暗褐色土と少量の褐色土混じる。ローム中粒部分的に多含 |
| 5層 | 暗褐色土 | 濡ったロームを若干含む |
| 6層 | 暗褐色土 | 濡ったロームが極少量混じる。ローム粒少含 |
| 7層 | 暗褐色土 | ローム中粒少含 |
| 8層 | 暗褐色土 | 暗褐色土・濡った白色粘土・極少量の黒褐色土が極く混じる。ローム中粒多含 |
| 9層 | 黒色土 | 黒色土と若干の暗褐色土が混じる。ローム小粒を少含 |
| 10層 | 黒色土 | 濡った白色粘土を少含 |
| 11層 | 暗褐色土 | 暗褐色土主体 |

- | | | |
|----|-------|------------------------|
| 1層 | 暗赤褐色土 | 暗赤褐色土主体 |
| 2層 | 灰白色土 | 黒褐色土に白色粘土が少量混じる。ローム粒少含 |
| 3層 | 暗赤褐色土 | 黒褐色土に白色粘土が混じる。ローム粒少含 |
| 4層 | 黒色土 | 焼土粒・ローム粒・白色粘土少含 |
| 5層 | 暗赤褐色土 | ロームと黒色土が混じる。白色粘土少含 |
| 6層 | 黒色土 | 黒色土主体 |
| 7層 | 暗赤褐色土 | 焼土と黒褐色土が混じる |

図128 A178

で、置かれた様に出土した。8は竈左脇の床面に、傾いた状態で出土している。10は鉄器の鎌であるが、床面に置かれた状態で出土した。墨書土器片が1点出土しているが、小破片であり、文字全体を知ることはできなかった。

所見 竈穴住居跡廃絶後すぐに、人為的な投入土によって埋戻された遺構である。床面には焼土の散布等が認められないため、不材等の焼却行為は行われておらず、「穴」としての放置を認めないかのように、一気に埋戻されている遺構でもある。A175・A177に類似するものであり、上谷遺跡Ⅱ地区に近づくにつれ、この種の住居跡が増える傾向があるようだ。Ⅱ地区の報告において指摘したが、地形の平坦さを意識するように埋戻されており、自然堆積に任せ「穴」として存在していた竈穴住居跡と対象的な遺構となっている。この目的が何であったかは、上谷遺跡の整理が終了していない時点では判然としないが、当該遺構の分布状況も考慮しなければならないだろう。

本住居跡の柱穴であるが、明確にしえなかったことは先述したが、竈脇は坑内で段差を残し、これが柱穴であるかもしれない。それに対面するように南東壁コーナーにあり、これが柱穴に対応するものかもしれない。今後類例と建築上の問題として、柱穴配置に整合性があるのかを含めて検討していくべきかもしれない。

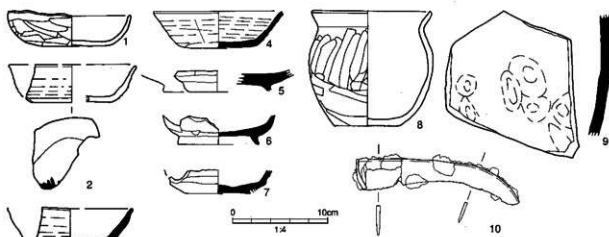


図129 A178 (2)

表58 A178遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 杯	130×70×32 ロクロ成形 体部ヘラ削り 口縁ナデ 内面は磨きを施す。	褐 青	青	完形	内面一部にスス 付着
2	土師器 杯	(134)×(84)×40 ロクロ成形 底部静止ヘラ切りののち周辺ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	褐 青	青	口縁～ 底部	墨書「□」 底部外面
3	須恵器 杯	(130)×(80)×39 ロクロ成形 体部下端未調整 全体に歪んだ形状をしている。	灰 青	青 砂粒多	口縁～ 底部	
4	須恵器 杯	135×81×39 ロクロ成形 底部ヘラ切りののち周辺ヘラ削り 体部下端一部ヘラ削り	灰 青	青 砂粒若干	完形	線刻「区」 体部外面
5	須恵器 高台付杯	—×—(23) ロクロ成形 体部下端ヘラ削り	灰 青	青 砂粒若干	底部片	
6	須恵器 高台付杯	—×—(31) ロクロ成形 底部回転ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	灰 青	青 砂粒若干	底部片	
7	須恵器 高台付杯	—×—(25) ロクロ成形 底部回転ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	砂暗灰 青	青	底部片	
8	土師器 小型甕	126×70×121 ロクロ成形 底部ヘラ削り 胴部上半部を縦位のヘラ削りを行い 口縁～胴部ナデ その後下半部を斜位のヘラ削り	褐 青	青	完形	
9	須恵器 甕	—×—×— タタキ目 内面 指頭任意あり	青灰 良	青	胴部片	
10	鉄器 鎌	長175×幅31×厚さ4 重量57.2g			略完形	

A179

検出地区 L6-32-3g、L6-42-1gにて検出した。

遺構 長軸3.46m×短軸3.43m×壁高0.42m、主軸方位はN-20°-Eを示している。平面形はほぼ長短のない隅丸方形である。南東コーナー付近が、大きく攪乱を被った堅穴住居跡である。床はハードローム上部の地床で、一部ソフトローム面のあらわれる床であった。竈前から出入口にかけて、硬化面を

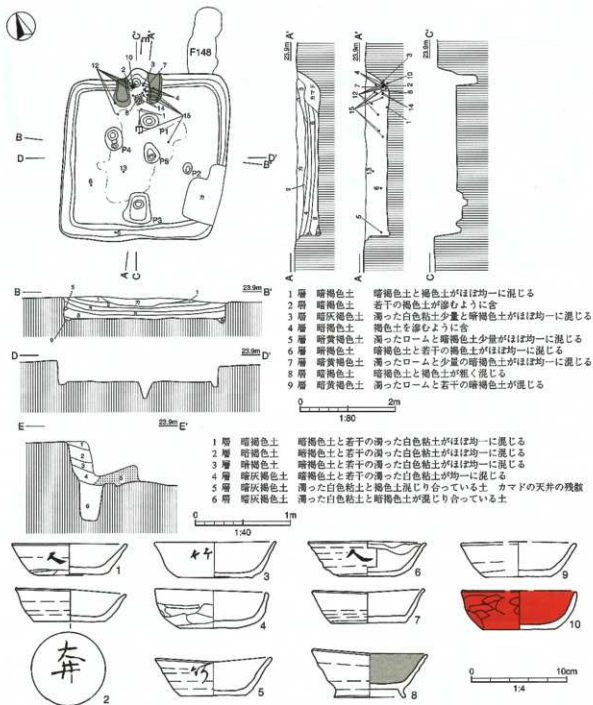


図130 A179

出した。床に5基のピットを検出したが、柱穴は不明である。壁柱穴は確認できなかった。竈と対面する南壁中央筋のP3が、出入口施設に伴うピットである。周溝は、竈袖下から壁下を巡っている。

竈は北壁中央に設けられ、竈袖は粘土と黒色土が混合したものを積み上げていた。火床は床と同じ高さで焚き口付近に検出し、赤化していた。竈内に深さ40cm程のピットが掘込まれ、竈構築時に埋めていた。覆土は様々な色調の自然堆積であった。

遺物 遺物の出土は少なく、床面からの出土は殆どなかった。7・8は図示できなかった土師器坏と共に14の中に入って、竈内の天井崩落土上に横たわって出土していた。

所見 墨書土器が5点出土しており、Ⅲ地区では出土点数が多い住居跡であり、「竹」の墨書が2点出土している。竈内から出土した7・8・14は、竈袖に挟まれるように出土していた。

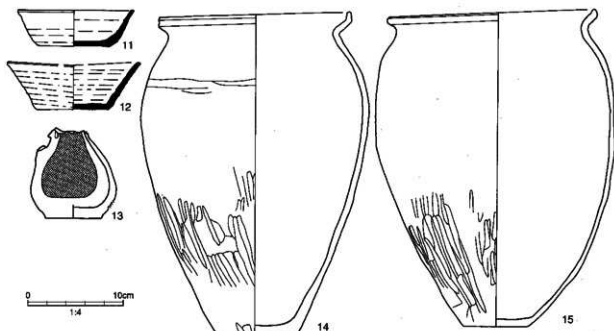


図131 A179 (2)

表59 A179遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	124×66×33 ロクロ成形 底部静止ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	褐 青	青	完形	墨書「人」 体部外面正位
2	土師器 坏	112×77×34 ロクロ成形 底部回転糸切り後外周ヘラ削り 体部下端未調整	淡褐 青	青	完形	墨書「大井」 底部外面
3	土師器 坏	129×80×37 ロクロ成形 底部回転糸切り後周辺ヘラ削り	橙褐 青	青	完形	墨書「竹」 体部外面正位
4	土師器 坏	119×88×40 ロクロ成形 底部回転糸切り後周辺ヘラ削り 体部外面ヘラ削り	褐 青	青	略完形	
5	土師器 坏	124×70×36 ロクロ成形 底部回転糸切り後周辺ヘラ削り 体部下端未調整	褐 青	青	略完形	墨書「竹」 体部外面正位
6	土師器 坏	129×60×37 ロクロ成形 底部回転糸切り後周辺ヘラ削り 体部下端ヘラ削り 内面は磨きを施し上半にスス付着	褐 青	青	完形	墨書「人」 体部外面正位
7	土師器 坏	119×79×32 ロクロ成形 底部回転ヘラ切り	淡褐 青	青	略完形	
8	土師器 高台付坏	122×76×46 ロクロ成形 内面は丁寧な磨きを施し、黒色処理をする	淡褐 白黒 青	青	略完形	内黒
9	土師器 坏	(122)×70×37 ロクロ成形 底部回転糸切り後周辺ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	褐 青	青	1/3	
10	土師器 坏	(121)×(86)×41 ロクロ成形 底部静止ヘラ切り 体部外面ヘラ削り 内面は磨きを施す	赤褐 青	青	1/3	赤彩

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
11	須恵器 坏	121×76×37 ロクロ成形 底部静止ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	青灰 青	青	略完形	
12	須恵器 坏	(140)×(76)×47 ロクロ成形 全体的に歪んでいる 底部静止ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	灰白 青	青	1/3	
13	土師器 壺	一×58×(95) ロクロ成形 最大径を胴下部に持つ 器面一部剥離 把手破損	褐 青	青	頸部～ 底部	胴部にスス付着
14	土師器 甕	220×86×338 最大径(胴上部)240 底部木葉痕 口縁をつまみ上げる(常態型) 口縁～頸部ナア 胴部下半ヘラ磨き	褐 青	青	略完形	
15	土師器 甕	221×(66)×332 最大径(胴中央部)250 口縁をつまみ上げる(上層部) 口縁～頸部ナア 胴部下半ヘラ磨き	褐 青	青	略完形	

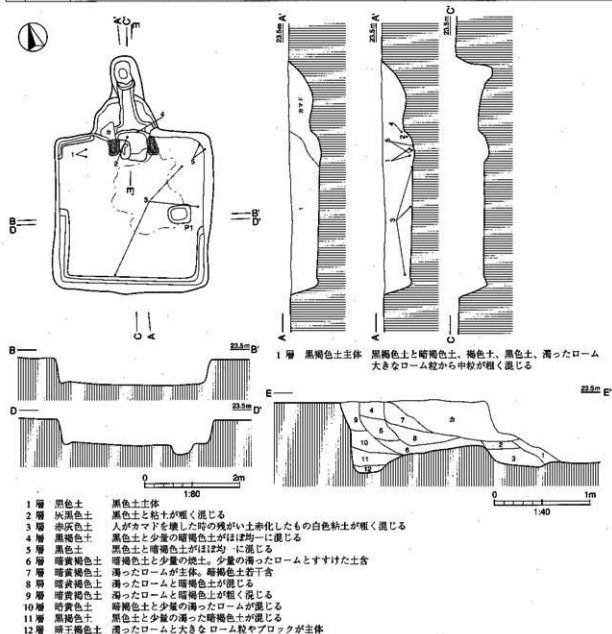


図132 A182

A182

検出地区 K6-67-1・2gにて検出した。

遺構 長軸3.43m×短軸3.31m×壁高0.56m、主軸方位はN-10°Eを示している。平面形は隅丸方形である。床はハードロームの地床であり、竈前に硬化面を検出した。主柱穴及び壁柱穴は検出できず、出入口のP1を検出したにすぎなかった。周溝は、北西コーナーと住居跡中央から南側に巡っているだけであった。竈は北壁中央に設けられ、竈袖は粘土を主体として積み上げられていた。浅く凹み状の竈ピットには火床は確認できなかった。煙道部は壁を奥行きあるように細長く掘込んだものであった。覆土は住居跡廃絶後の投入土による人為堆積であった。

遺物 極めて少なかった。

所見 人為的な投入土による、瞬時的に埋戻した住居跡である。廃絶時における焼却行為は認められなかった。また、竈の煙道部であるが、壁掘込みの大きなピットは攪乱かもしれない。その場合、煙道部が細長い竈となり、上谷遺跡でも異例の竈構造となるものである。

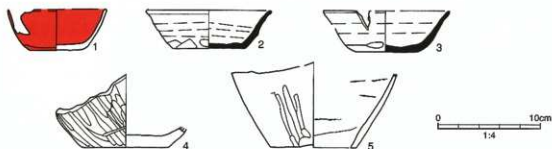


図133 A182 (2)

表60 A182遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(104)×56×43 ロクロ成形 底部回転ヘラ切り 体部下端ヘラ切り	赤 普	普	1/4	内外面赤彩
2	須恵器 坏	132×76×40 ロクロ成形 底部静止ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	青灰 普	普 白色砂粒 若干含		略完形
3	須恵器 坏	(132)×70×43 ロクロ成形 底部静止ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	青灰 普	普 白色砂粒 若干含	1/4	
4	土師器 甕	—×90×(75) 底部木葉痕 胴部斜位のヘラ磨き	淡褐 普	普		胴部～ 底部片
5	土師器 瓶	—×—×(90) 輪積み 胴部丁寧な磨きを施す 内面に輪積み痕あり	赤褐 普	普		胴下半

第2項 掘立柱建物跡

上谷遺跡Ⅲ地区における奈良・平安時代の掘立柱建物跡は、9棟が検出されている。前回の報告地区であるⅡ地区で検出した57棟に比べ極端にその数を減じており、しかも重複する掘立柱建物跡がない等、遺構の傾向を変えているようにみえた。遺構の検出地区は9調査区・8調査区、10調査区にわたっているが、特に8・9・10調査区の境界付近に多かった。2棟は離れているが7棟が隣接しており、Ⅲ地区の掘立柱建物跡の遺構配置の傾向を端的にあらわしていた。

掘立柱建物跡の規模は、2間×3間が2棟、2間×2間が6棟、不整形(円形か?)1棟であった。このうち2間×2間の掘立柱建物跡のうち、片側が2間であるが、対面側が3間の遺構も1棟を検出した。この形式の掘立柱建物跡はⅡ地区には多く検出したが、本地区での割合は少ないものと言えよう。一方、Ⅱ地区で多かった2間×2間の掘立柱建物跡は本地区でもその主体を占めていたが、2間×3間の棟数は減少している。Ⅱ地区の報告においても若干触れた2間×2間の掘立柱建物跡が上谷遺跡の特徴となるかは、今後に報告予定のⅣ地区Ⅴ地区の整理と併せて考えなければいけないが、少なくともⅢ地区ではこの間数の掘立柱建物跡が約66%を占めていることとなっている。

また、8・9・10調査区境界付近に集中する掘立柱建物跡は、不整形の遺構を除くと、2間×3間が1棟、2間×2間が5棟の6棟が検出されている。同一台地の栗谷遺跡の例等を見ると2軒程度の同時存在が想定され、この6棟がその例となるのか、Ⅱ地区と異なる単位集団の最低限の掘立柱建物跡の棟数を窺わせる検出状況であった。いずれにしても今後に報告予定のⅣ地区Ⅴ地区では多くの掘立柱建物跡群が検出されており、Ⅲ地区の掘立柱建物跡もその遺構群と併せて考えていく必要がある。

以下に、Ⅲ地区にて調査された掘立柱建物跡について報告していくこととするが、全体的に当該遺構からの遺物出土は極めて少なかった。

B047

検出地区 L7-30-1・2・3・4gにて検出した。

遺構 2間×3間の掘立柱建物跡であるが、長軸が短軸に比べて長い遺構である。長軸5.17m×短軸3.90m、長軸方位はN-24°Eを示している。柱穴の深さは0.47~0.65mであるが、各柱穴の平面規模は小さく、その規模に比べ深さがある感じを与える遺構である。また、柱穴の深さは北西列の柱穴は全て0.60mを越え、南東列では北東隅のP9を除き0.60mを越えるものはなくやや浅いものであった。長軸方向の北西柱列の中間に、前後してP10・P11の2基を検出した。各柱列の軸線状に柱穴はほぼ直線上に配列されているが、P10とP11は若干ずれている。P10が浅く、P11は深くなる柱穴であった。柱痕はすべての柱穴で検出したが、柱のアタリは確認されなかった。覆土は柱痕部は黒色土であったが、他の層は突固められた様子が窺える黒褐色土を主体としていた。

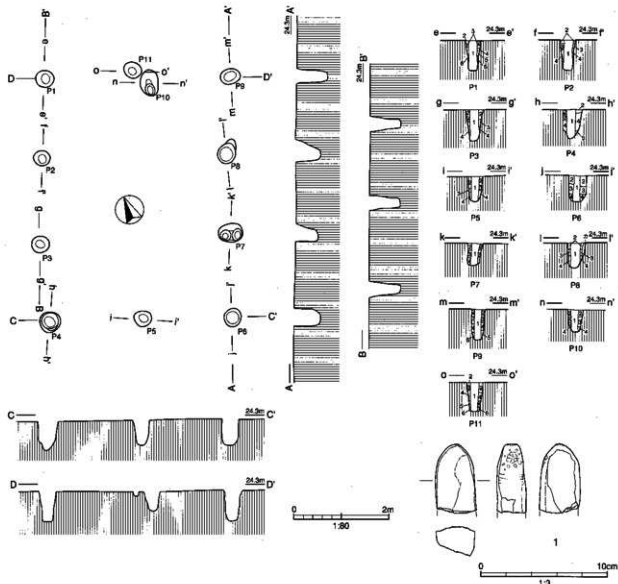
遺物は扁平片刃石斧の断片と、流れ込みと思われる縄文早期・燃系土土器片が出土している。

所見 北西列と北東列が深く、対面する柱列は浅い傾向を示す掘立柱建物跡であった。

表61 B047遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の 特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	石器 磨製石斧	長軸(47)×短軸29×厚さ8 重量18.7g 中形の扁平片刃石斧の一種と思われる 薄手の作りである 刃部を含めて全体に良好な研磨が施されている			1/3	



P1
 1層 黒色土 ローム粒が多量混じる
 2層 黒色土 ローム粒が少量混じる
 3層 黄褐色土 ソフトローム主体
 4層 黒色土 ローム粒が少量混じる
 5層 暗褐色土 ローム粒が少量混じる
 6層 黒色土 ローム粒が少量混じる

P2
 1層 黒色土 ローム粒を微量含
 2層 黒色土 ローム粒を少量含
 3層 黒色土 ローム粒を多量含
 4層 暗褐色土 暗褐色土主体

P3
 1層 黒色土 黒色土主体の土
 2層 黒色土 ローム粒が多量混じる
 3層 黒色土 ローム粒が少量混じる
 4層 黒色土 ローム粒が微量混じる

P4
 1層 黒色土 ローム粒が多量混じる
 2層 黄褐色土 ソフトローム主体
 3層 黒色土 黒色土が少量混じる
 4層 黒色土 ローム粒が多量混じる
 5層 黒色土 ローム粒が多量混じる
 径5mm位のロームブロック

P5
 1層 黒色土 ローム粒が少含
 2層 暗褐色土 黒色土とロームが混じる
 3層 黒色土 ローム粒が少含
 4層 暗褐色土 ローム粒が多含

P6
 1層 黒色土 ローム粒が少含
 2層 暗褐色土 黒色土とロームが混じる
 3層 黒色土 ローム粒を多量含
 4層 黒色土 径5mm~10mm位の
 ロームブロックを多量含

P7
 1層 黒色土 ローム粒が少含
 2層 黒色土 ローム粒が少含
 3層 暗褐色土 暗褐色土が少量混じる
 4層 黒色土 ローム粒が少含

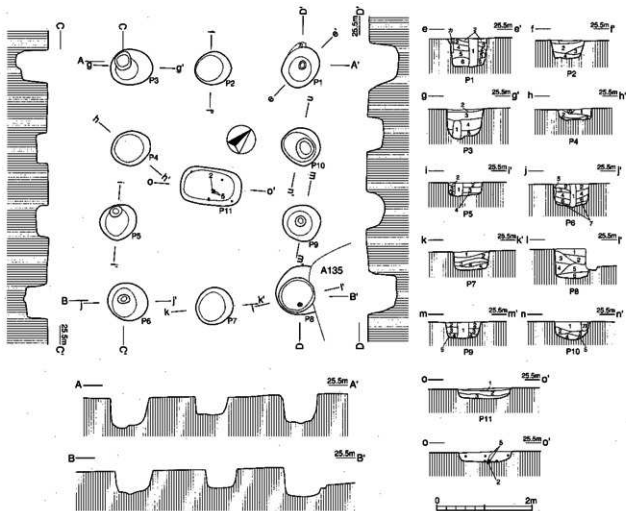
P8
 1層 黒色土 ローム粒を微量含
 2層 暗褐色土 ローム粒を微量含
 3層 黒色土 ローム粒を微量含
 4層 黒色土 黒色土主体の土

P9
 1層 黒色土 ローム粒が微量含
 2層 黒色土 ローム粒が少量含
 3層 暗褐色土 ローム粒が少量含
 4層 黄褐色土 ソフトローム主体
 5層 暗褐色土 ローム粒が少量含

P10
 1層 黒色土 黒色土主体の土
 2層 黒色土 ローム粒が少量含
 3層 暗褐色土 ソフトロームと黒褐色土が
 混じる
 4層 黒色土 ローム粒が微量含

P11
 1層 黒色土 ローム粒が微量含
 2層 黒色土 ローム粒が微量含
 3層 暗褐色土 ソフトロームと黒褐色土が
 混じる。ローム粒が少量含
 4層 黒色土 ソフトロームと黒褐色土が
 混じる。ローム粒が少量含
 5層 暗褐色土 ソフトロームと黒褐色土が
 混じる。ローム粒が少量含
 6層 暗褐色土 暗褐色土主体の土

図134 B047



- P1**
- | | | |
|----|------|---------------------|
| 1層 | 黒色土 | ローム粒が少量含 |
| 2層 | 暗褐色土 | ローム粒が多量含 |
| 3層 | 暗褐色土 | 径5-10mm位のロームブロック少量含 |
| 4層 | 暗褐色土 | ローム少量混じる。ローム粒が多量含 |
| 5層 | 暗褐色土 | 径5-10mm位のロームブロック多量含 |
| 6層 | 黒色土 | ローム粒が多量含 |
| 7層 | 黒色土 | 径5-10mm位のロームブロック多量含 |

- P2**
- | | | |
|----|------|---------------|
| 1層 | 暗褐色土 | ローム粒が多量含 |
| 2層 | 黒色土 | ローム粒が少量含 |
| 3層 | 黒色土 | ローム粒が微量より多めに含 |
| 4層 | 暗褐色土 | ローム粒が微量含 |

- P3**
- | | | |
|----|------|--------------------------|
| 1層 | 黒色土 | ロームが少量混じる |
| 2層 | 暗褐色土 | ロームが少量混じる |
| 3層 | 暗褐色土 | ローム粒が少量含 |
| 4層 | 暗褐色土 | 径5-15mm位のローム粒少量含 |
| 5層 | 暗褐色土 | ローム粒が少量含 径5mmのロームブロック少量含 |
| 6層 | 暗褐色土 | 径10-20mm位のロームブロック微量含 |
| 7層 | 暗褐色土 | ローム粒が微量含 |

- P4**
- | | | |
|----|------|-----------|
| 1層 | 暗褐色土 | 黒色土が少量混じる |
| 2層 | 暗褐色土 | ローム粒が少量含 |
| 3層 | 暗褐色土 | 黒色土が少量混じる |

- P5**
- | | | |
|----|------|---------------|
| 1層 | 黒色土 | ロームが少量混じる |
| 2層 | 暗褐色土 | ロームが少量含 |
| 3層 | 暗褐色土 | ロームと黒色土が少量混じる |
| 4層 | 暗褐色土 | ローム粒が少量含 |

- P6**
- | | | |
|----|------|------------------|
| 1層 | 黒色土 | ローム粒が微量含 |
| 2層 | 黒色土 | ローム粒が微量含 |
| 3層 | 黒色土 | ローム粒少量、焼土粒少量含 |
| 4層 | 黒色土 | ロームが少量混じる |
| 5層 | 暗褐色土 | ソフトロームと黒色土が粗く混じる |
| 6層 | 黒色土 | ローム粒が微量含 |
| 7層 | 黒色土 | ローム粒が少量含 |

- P7**
- | | | |
|----|------|-----------------|
| 1層 | 黒色土 | ローム粒が多量含 |
| 2層 | 暗褐色土 | ローム粒が多量含 |
| 3層 | 黒色土 | ローム粒が多量含 |
| 4層 | 暗褐色土 | ソフトロームと暗褐色土が混じる |
| 5層 | 暗褐色土 | ロームが少量混じる |

- P8**
- | | | |
|----|------|-----------|
| 1層 | 暗褐色土 | ローム粒が少量含 |
| 2層 | 暗褐色土 | ローム粒が微量含 |
| 3層 | 黒色土 | ローム粒が微量含 |
| 4層 | 暗褐色土 | ロームが少量混じる |
| 5層 | 暗褐色土 | ロームが少量混じる |
| 6層 | 暗褐色土 | ロームは含まない |

- P9**
- | | | |
|----|------|--------------------|
| 1層 | 黒色土 | ローム粒が微量含 |
| 2層 | 暗褐色土 | ロームが少量混じる |
| 3層 | 暗褐色土 | ロームが少量混じる。ローム粒が少量含 |
| 4層 | 暗褐色土 | 暗褐色土主体 |
| 5層 | 黄褐色土 | ソフトロームブロック |

- P10**
- | | | |
|----|------|-----------------------|
| 1層 | 暗褐色土 | ロームと黒色土が少量混じる |
| 2層 | 暗褐色土 | ロームが少量混じる |
| 3層 | 暗褐色土 | ロームが少量混じる。ローム粒多量含 |
| 4層 | 暗褐色土 | ロームと黒色土が少量混じる。ローム粒少量含 |
| 5層 | 暗褐色土 | 暗褐色土主体 |

図135 B048

B048

検出地区 L7-65-1・2・4g、L7-66-1gにて検出した。

遺構 2間×3間の掘立柱建物跡である。長軸5.09m×短軸3.76m、長軸方位はN-43°-Wを示している。B048に比してがっしりした掘立柱建物跡であるが、全体として柱穴の深さが浅い感じを与えるものである。

柱穴の深さは0.60～0.21mと差があり、不均一であったが、四隅の柱穴は0.42～0.60mと深くなり、中間の柱穴は浅くなっている傾向が窺えた。柱痕は、P1・P3・P5・P6・P9の5基で検出した。また、柱のアタリは、P8の1基のみ確認することができた。

覆土は基本的に柱材の層が黒色土となり、周囲の充填土は黒褐色土と暗褐色土であった。充填した土は突固められており、覆土にはローム粒を混入させるものであった。

P11が、掘立柱建物跡の中間に検出された。鉄器や土師器坏、須恵器甕片などが出土したが、本掘立柱建物跡に伴うものか迷うものであった。覆土は黒褐色土を主体としており自然堆積であったが、柱穴とは異なるものであった。

鉄器はカンヌキ錠の差し金具であるのか判断に迷うが、一部木質部が付着しているものである。

このB048はB047と同様に本地区では少ない2間×3間の掘立柱建物跡であり、他の2間×2間の中心的な建物跡になるのかもしれない。しかし上谷遺跡Ⅱ地区及びⅣ地区V地区と異なり、本地区の掘立柱建物跡は集落の中の基本単位の掘立柱建物跡と捉えられよう。

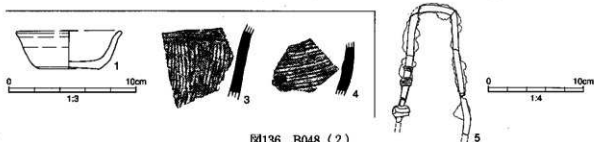


図136 B048 (2)

表62 B048遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調査等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(110)×63×40 ロクロ成形 底部回転糸切りの後へラ削り 体部は直線に立ち上がる	褐 青	青	口縁～ 底部	
2	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐 青	青	底部	墨書「□」 底部外面 未揭示
3	須恵器 甕	-×-×- ロクロ成形 頸部ナブ割部タタキ目	青灰 青	青 白色砂粒	胴部片	
4	須恵器 甕	-×-×- タタキ目	灰 青	青	胴部片	
5	鉄器 不明	長さ(136)×幅52×厚さ6 重量41.2g			2/3	カンヌキ錠の 差し金具?

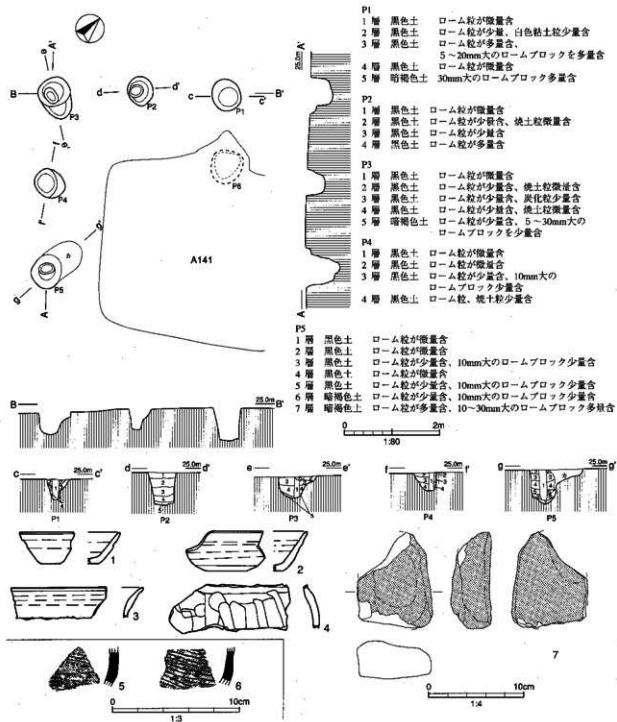


図137 B049

B049

検出地区 L7-23-4g、L7-24-1gにて検出した。

遺構 2間×2間の掘立柱建物跡である。長軸(3.70)m×短軸3.68m、長軸方位はN-42°-Wを示している。ほぼ方形の掘立柱建物跡である。柱穴の深さは0.72~0.38mと不均一であるが、四隅が深く、中間の柱穴が浅い傾向を示している。P6は、A141の竈セクションより復元した柱穴位置である

また、柱穴覆土から土師器坏や砥石や、縄文時代早期・条痕文系土器片も出土している。

所見 A141との重複関係であるが、B049がA141の竈に残っていたことからB049が新しいと判断した。

表63 B049遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	粘土	遺存	備考
1	土師器 坏	一×一×(33) ロクロ成形	褐色 良	緻密	口縁片	
2	土師器 坏	一×一×42 ロクロ成形 体部下端ヘラ削り 内面は磨きを施す	褐色	普	口縁～ 底部	
3	土師器 壺	一×一×(32) ロクロ成形 口縁内面ナゲ調整	褐色	普	口縁片	
4	土師器 壺	一×一×(50) ロクロ成形 頸部ナゲ調整 胴部との境に稜を作る 胴部上半 斜位のヘラ削り	褐色	普	胴部片	
5	須恵器 壺	一×一×一 ロクロ成形 タタキ目	灰 普	普 砂粒若干	胴部片	
6	須恵器 壺	一×一×一 ロクロ成形 タタキ目	灰 普	普 砂粒若干	胴部片	
7	石器 砥石	長軸101×短軸79×厚さ41 重量380.3g 大きく破損しているが、本来の形状は隅丸方形を呈する 両面及び側縁にかけて、明瞭な研磨痕が残されている 特に上面は滑らかであり、中央部はわずかに凹む 研磨痕は破損面の一部にも認められる			1/2	

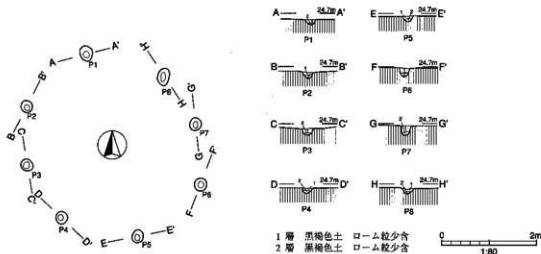


図138 B050

B050

検出位置 M6-94-1・2・3・4gにて検出した。

遺構 柱穴数8基の円形か不整形となる掘立柱建物跡であり、円形とすると直径3.68m～3.70mの遺構である。柱穴の深さは0.24～0.27mと均一であるが、P6・P7が0.68m～0.72mと深いものであった。

所見 平面形態が不明であり、中世以降か円形の竪穴住居跡の柱穴とも想定したが、判断に迷う遺構であるため、奈良・平安時代の掘立柱建物跡として扱うこととした。類例の増加をまって、検討したい遺構である。

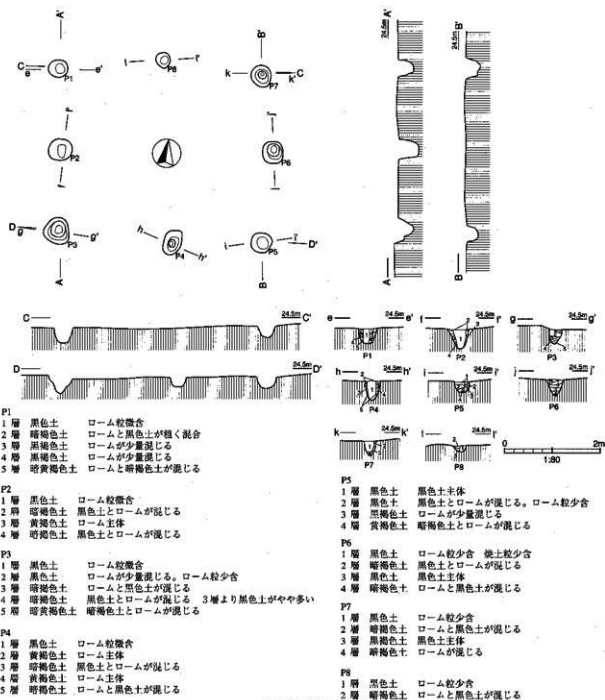


図139 B051

B051

検出地区 H7-2-1・2・3・4gにて検出した。

遺構 2間×2間の掘立柱建物跡である。長軸4.35m×短軸3.53m、長軸方位はN-83°Eであった。柱穴の深さは0.13~0.43mと浅いものであったが、ほぼ20.40m前後の深さが平均的な柱穴の深さであった。柱痕はすべての柱穴で確認したが、柱のアタリは確認できなかった。

所見 遺物の出土はなく時期は不明であるが、Ⅲ地区における単位集団の掘立柱建物跡ではないかと想定している。Ⅲ地区においては掘立柱建物跡は少ないが、そのなかでも2間×2間の掘立柱建物跡が多く、当該遺構の姿の一端を表していると考えられる。Ⅱ地区においても2間×2間の掘立柱建物跡が多く、これが上谷遺跡の掘立柱建物跡の主体となるのかはⅣ地区、Ⅴ地区の掘立柱建物跡群との比較の中で検討したい。

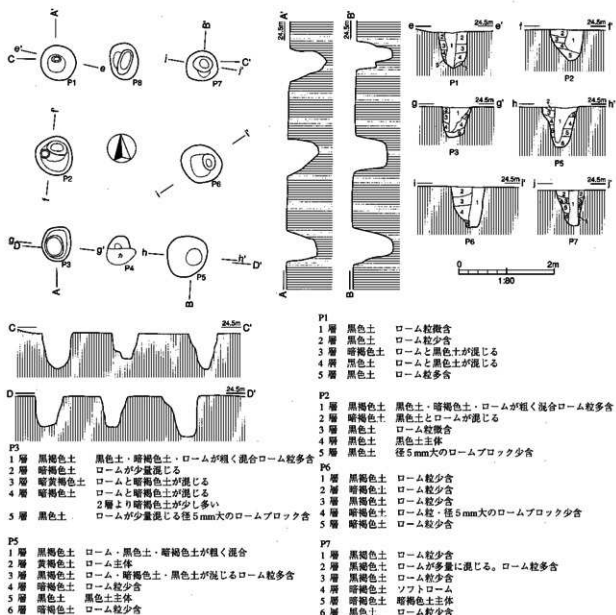


図140 B052

B502

検出地区 M7-12-3・4g、22-1・2gにて検出した。

遺構 2×2間の掘立柱建物跡である。長軸4.06m×短軸3.11m、長軸方位はN-5°-Eであった。柱穴の深さは0.56～0.88mとやや不均一であるが、四隅が深いという傾向はなかった。柱痕はP4を除き確認できたが、柱痕覆土の乱雑さからP2・P3・P5は柱材の引抜きと捉えられた。

出土量は僅かであるが、遺物は須恵器壺片と角釘が出土している。また流れ込みではあるが、縄文時代早期・燃糸文土器片と条痕文土器片も出土している。

所見 直接的に本遺構に関わるものなのか不明であるが角釘が出土したことは、掘立柱建物跡の建造を考える上で示唆に富む資料となろう。いずれにしても掘立柱建物跡から遺物が出土することは少ないが、本地区の当該遺構を考える上でも貴重な成果といえる。

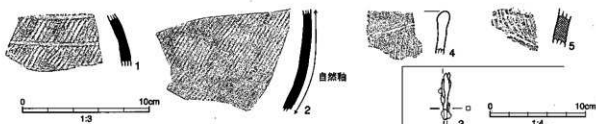


図141 B052 (2)

表64 B052遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	粘土	遺存	備考
1	須恵器 甕	-X-X- 外面 上半タタキ 内面 上半ナデ及び指頸圧痕	灰褐色	粗砂粒 白色粒含	別部片	
2	須恵器 甕	-X-X- 外面 上半タタキ 内面 上半ナデ及び指頸圧痕	灰褐色 及	黒色土 白色粒含	別部片	外面自然軸
3	鉄器 角釘	長さ(49)×幅4×厚さ4 重量5.8g			1/2	腐食による 剥離大きい

B053

検出地区 L7-9-4g、L7-10-1・3gにて検出した。

遺構 2間×2間の掘立柱建物跡であり、長軸3.51m×短軸2.45m、長軸方位はN-14°Eを示している。やや細身の掘立柱建物跡である。柱痕はP6・P7で検出したが、柱のアタリは確認できなかった。柱穴の深さは0.36～0.55mとなり、やや均一化しているが、四隅の柱穴が深いということにはなかった。

本遺構を2間×2間と先述したが、東側柱列は中間に2基の柱穴が近づいた距離で存在する。上谷Ⅱ地区でも同様な例が多いが、補助の柱なのか出入口の補助柱なのかは判断できなかった。他の遺跡の類例と比較するなかで検討すべきかもしれない。

遺物 本遺構から出土した遺物は、極めて少なかった。1は土師器坏の体部下端に墨書されたものである。柱穴覆土への意識的埋納か、流れ込みかは捉えられなかったが時期的な決定ができる資料となっている。

B054

検出位置 L7-19-2・4g、L7-20-1・3gにて検出した。

遺構 2間×2間の掘立柱建物跡である。長軸3.93m×短軸3.15m、長軸方位はN-17°Eを示している。P3・P4・P6・P7で柱痕を確認した。遺物は、土師器坏と石鏝が出土している。

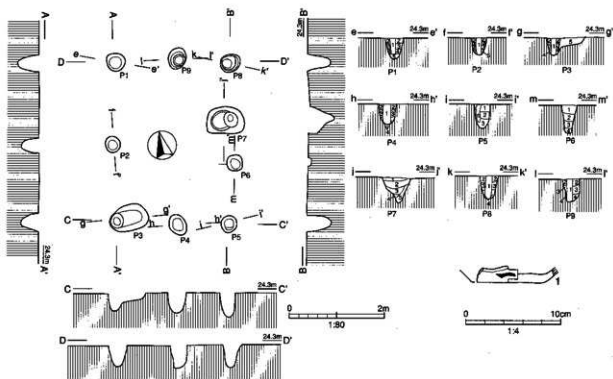
所見 P9は自然堆積であり、掘立柱建物跡には伴わないものと判断した。

B055

検出地区 L6-98-1・3・4gにて検出した。

遺構 2間×2間の掘立柱建物跡であり、長軸4.05m×短軸3.35m、長軸方位はN-10°Eを示す。P1を除いて柱痕を検出した。柱穴の深さは0.25～0.59mと不均一であった。覆土は、比較的突固められたものであった。

所見 柱穴の平面規模のやや小さな掘立柱建物跡である。四隅の柱穴より中間の柱穴がやや深くなる傾向が窺える建物跡であった。



- P1**
- 1層 黒色土 ローム粒微含
 - 2層 黒色土 ローム粒少含
 - 3層 暗褐色土 ローム粒少含
 - 4層 黒色土 ローム粒少含
 - 5層 暗褐色土 5mm粒のプロック少含

- P2**
- 1層 黒色土 ローム粒微含 焼土粒も微含
 - 2層 暗褐色土 ローム粒微含 焼土粒も微含
 - 3層 黄褐色土 ソフトロームプロック
 - 4層 暗褐色土 5mm粒のプロック微含
 - 5層 暗褐色土 ローム粒微含

- P3**
- 1層 黒色土 暗褐色土が少量混じる
 - 2層 暗褐色土 ローム粒少含
 - 3層 暗褐色土 ローム粒微含
 - 4層 黄褐色土 ローム主体の土に暗褐色土が微粒の混じる
 - 5層 暗褐色土 ロームが少量混じる

- P4**
- 1層 黒色土 ローム粒を微含
 - 2層 黒色土 ロームが微含
 - 3層 暗褐色土 ロームが少含
 - 4層 暗黄褐色土 ロームが混じる

- P5**
- 1層 黒色土 ロームを少含
 - 2層 暗褐色土 ロームを少含
 - 3層 黒色土 ローム粒を少含

- P6**
- 1層 暗褐色土 ローム粒及び焼土粒を微含
 - 2層 暗褐色土 ローム粒少量混じる
 - 3層 黒色土 ローム粒微含
 - 4層 暗褐色土 ローム粒微含

- P7**
- 1層 暗褐色土
 - 2層 暗褐色土 ローム少量混じる
 - 3層 暗褐色土 ローム多含
 - 4層 黄褐色土 ソフトロームプロック
 - 5層 黄褐色土 ローム主体とした土に褐色土が少量混じる

- P8**
- 1層 黒色土 ローム粒微含
 - 2層 暗褐色土 暗褐色土主体
 - 3層 暗褐色土 ローム粒少量混じる
 - 4層 黒色土 ローム少含

- P9**
- 1層 黒色土 暗褐色土が微量に混じる
 - 2層 黒色土 ローム少量混じる
 - 3層 暗褐色土 ローム粒を微含
 - 4層 暗褐色土 ローム粒を少含

図142 B053

表65 B053遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器	-X-X- ロック成形 底部回転ヘラ切り	淡褐色	普	底部片	墨書「□」 体部外面

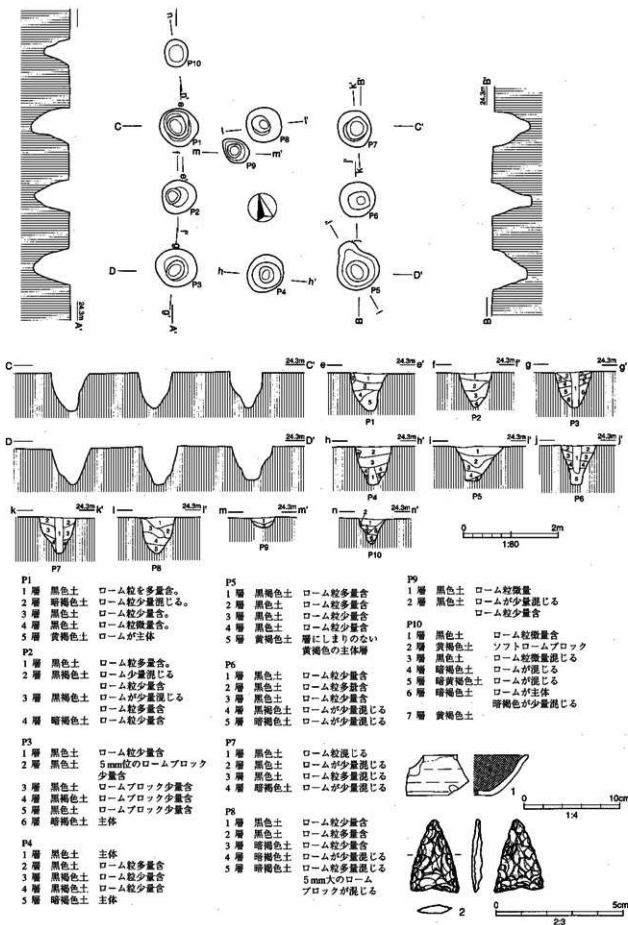


図143 B054

表66 B054遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の 特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器	—×—×43 ロタロ成形 底部回転ヘラ切り 体部下端へラ削り、内面は丁寧な磨きを施し黒色処理をする	赤褐色 黒青	菅	口縁～ 底部	内黒
2	石器 石鏃	長29×最大幅19×厚さ3.5 器面上の剥離は全てネガ面			略充形	チャート

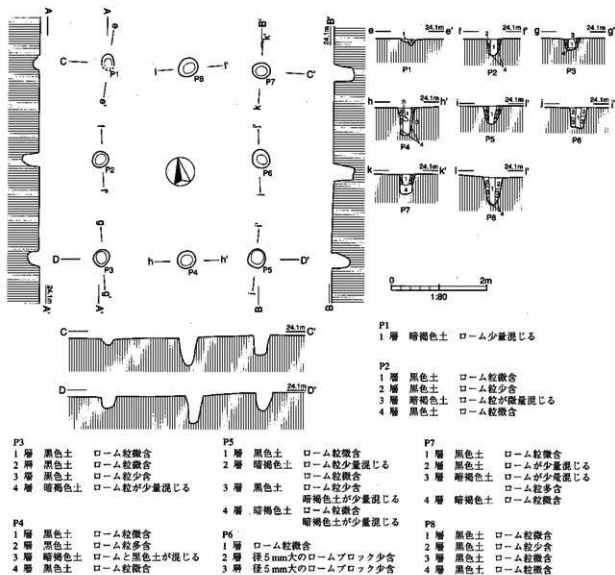


図144 B055

表67 掘立柱建物一覧表

(単位m)

遺構番号	検出区	間 数		主軸方位		柱穴規模 (長軸×短軸×深さ)						備 考
		長 軸	短 軸									
B047	L7-30-1 2 3 4 g	2×3	N-24°-W	5.17	3.90	P1 0.39×0.36×0.63	P7 0.52×0.40×0.48					
						P2 0.36×0.32×0.64	P8 0.55×0.38×0.53					
						P3 0.38×0.36×0.65	P9 0.42×0.32×0.65					
						P4 0.45×0.44×0.61	P10 0.56×0.37×0.47					
				P5 0.38×0.33×0.53	P11 0.39×0.33×0.61							
				P6 0.40×0.37×0.55								
B048	F7-65-1 2 4 L7-66-1g	2×3	N-43°-W	5.09	3.76	P1 0.90×0.72×0.60	P7 0.81×0.76×0.39					
						P2 0.77×0.70×0.38	P8 1.06×0.79×0.42					
						P3 0.89×0.75×0.58	P9 0.81×0.79×0.34					
						P4 0.95×0.73×0.20	P10 0.84×0.78×0.39					
						P5 0.77×0.76×0.27	P11 1.28×0.78×0.39					
						P6 0.85×0.79×0.46						
B049	L7-23-4 L7-24-1 3g	2×2	N-42°-E	3.70	3.68	P1 0.68×0.59×0.68	P4 0.66×0.55×0.38					
						P2 0.64×0.55×0.42	P5 0.72×0.62×0.72					
						P3 0.90×0.67×0.48	P6 0.64×0.68×0.42					
B050	M6-94-1 2 3 4g	— × —	N-15°-W	4.02	3.65	P1 0.33×0.27×0.11	P6 0.28×0.26×0.19	平面形は楕円に配列される				
						P2 0.25×0.24×0.12	P7 0.27×0.25×0.21					
						P3 0.27×0.25×0.14	P8 0.37×0.24×0.12					
						P4 0.27×0.24×0.11						
						P5 0.28×0.23×0.12						
B051	M7-2-1 2 3 4g	2×2	N-83°-E	4.35	3.53	P1 0.41×0.37×0.31	P7 0.48×0.42×0.32	柱痕はP1,2,4,7で検出 柱のアタリは確認されず				
						P2 0.51×0.48×0.41	P8 0.34×0.30×0.13					
						P3 0.44×0.38×0.30						
						P4 0.54×0.37×0.41						
						P5 0.43×0.41×0.23						
						P6 0.47×0.43×0.36						
B052	M7-22-2 4g M7-23-1 3g	2×2	N-5°-E	4.06	3.11	P1 0.73×0.73×0.76	P6 0.88×0.79×0.88	遺構確認面にてP1,4,6,7,8の 柱痕を確認 セクションにてP1,6,7,8の 柱痕を検出 柱の引抜きはP2,3,5				
						P2 0.82×0.76×0.65	P7 0.68×0.65×0.75					
						P3 0.73×0.63×0.64	P8 0.76×0.61×0.56					
						P4 不明×0.47×0.56						
						P5 0.92×0.84×0.84						
B053	L7-9-4g L7-10-1 3g	2×2	N-14°-E	3.51	2.45	P1 0.41×0.39×0.37	P6 0.35×0.35×0.55	P6,7は柱痕を捉えること ができなかった				
						P2 0.35×0.32×0.36	P7 0.79×0.61×0.49					
						P3 0.83×0.51×0.45	P8 0.45×0.38×0.49					
						P4 0.48×0.35×0.41	P9 0.49×0.37×0.49					
						P5 0.35×0.33×0.52						
B054	L7-19-2 4g L7-20-1 3g	2×2	N-17°-E	3.93	3.15	P1 0.81×0.75×0.80	P6 0.75×0.73×0.85	P3,4,6,7は柱痕を確認 P9は覆土自然堆積 B054に 伴わない可能性				
						P2 0.73×0.69×0.73	P7 0.80×0.71×0.77					
						P3 0.88×0.83×0.75	P8 0.79×0.79×0.79					
						P4 0.79×0.75×0.81	P9 0.63×0.49×0.20					
						P5 1.05×0.91×0.71	P10 0.59×0.49×0.53					
B055	L6-98-1 3 4g	2×2	N-10°-E	4.05	3.35	P1 0.36×0.26×0.13	P6 0.41×0.37×0.43	P1を除いて柱痕検出 覆土は比較的突固められて いた				
						P2 0.35×0.33×0.36	P7 0.39×0.33×0.43					
						P3 0.37×0.33×0.25	P8 0.49×0.39×0.60					
						P4 0.39×0.37×0.59						
						P5 0.41×0.37×0.38						

第3項 土坑

奈良・平安時代の土坑は35基を検出した。広い調査対象地の中で遺構分布傾向は特にながら、当然ながら奈良・平安時代の竪穴住居跡の周辺に多い。当然「すまい」としての竪穴住居跡以外に、何らかの作業場所となる土坑が設けられていたはずだが、上谷遺跡Ⅲ地区としても少ない遺構数であり、その用途・目的を捉えることはできなかった。

また、奈良・平安時代の土坑のうち、掘立柱建物跡の柱に類似するものがあつたが、配置上でいずれの建物跡にも属せないものも土坑として扱っている。

以下、上谷遺跡Ⅲ地区の奈良・平安時代の土坑について報告していくこととする。

D105

検出地区 L7-72-2gにて検出した。

遺構 長軸0.79m×短軸0.60m×深さ0.36m、長軸方位はN-38°-Wを示す。平面形は括れた楕円形である。坑底は南壁寄りにつくられているが平坦であり、壁の立ち上がりは急であつた。覆土は褐色土系を主体とした自然堆積である。

所見 出土した遺物はなかつたが、覆土等から奈良・平安時代の土坑と捉えた。

D107

検出地区 L7-72-4gにて検出した。

遺構 長軸0.91m×短軸0.82m×深さ0.31m、長軸方位はN-15°-Eを示す。平面形はほぼ円形である。覆土は褐色土を主体とした人為堆積であつた。坑底は東壁寄りにつくられ、やや北壁側に下るものであつた。壁は坑底から急に立ち上がっていた。遺物の出土はなかつた。

所見 掘立柱建物跡の柱穴覆土の、柱を引抜いた覆土に類似しているが、やや不明瞭なため土坑として扱った。

D110

検出地区 L7-48-2Gにて検出した。

遺構 長軸0.29m×短軸0.29m×深さ0.17m、長軸方位はN-15°-Eを示す。平面形は円形である。坑底は平坦さを意識させない、丸みを帯びたものであつた。黒褐色土が自然堆積した覆土であるが、土師器の墨書土器が出土2点出土している。

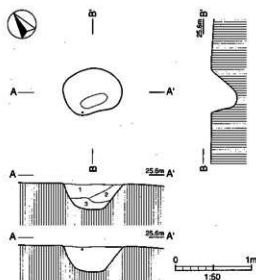
所見 小規模な土坑であるが、墨書土器が出土しており、本来は単独の土坑というより、他の遺構に付属するものであつたかもしれない。坑底等から、掘立柱建物跡の柱穴とは捉えられなかつた。

D111

検出地区 L7-46-3gにて検出した。

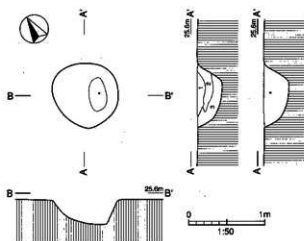
遺構 長軸1.05m×短軸0.80m×深さ0.07m、長軸方位はN-36°-Eを示す。平面形は楕円形である。浅い凹み状の土坑である。坑底は平坦であり、壁はやや斜めに立ち上がっていた。覆土は炭化材層のみであつた。遺物は出土していない。

所見 どちらかという中世以降の炭窯の印象であるが、平面形に丸みを持つ等の新しい時代の所産とは考えられない形状から、当該時期の土坑と判断した。更に検討した場合には、所属する時代が動くかもしれない。



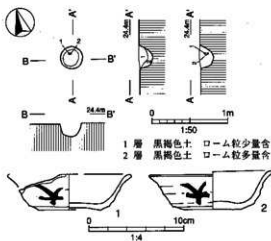
- 1層 黒褐色土 ローム粒を部分的に含
 2層 褐色土 ローム主に黒色含
 3層 暗褐色土 黒色土混合層

D105



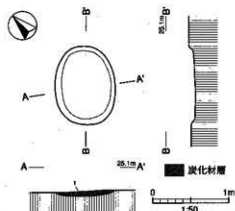
- 1層 暗褐色土 ローム黒色土混合層
 2層 黒褐色土 2-3mm大粒含
 3層 褐色土 ローム土主体 黒色土粒少量

D107



D110

- 1層 黒褐色土 ローム粒少量含
 2層 黒褐色土 ローム粒多量含



- 1層 黒色土 多量の炭化粒、ローム粒が粗く混じる

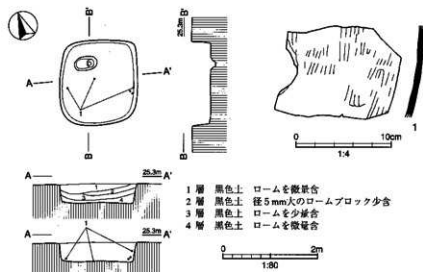
D111

図145 D105・D107・D1010・D1011

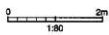
表68 D110遺物観察表

(単位mm)

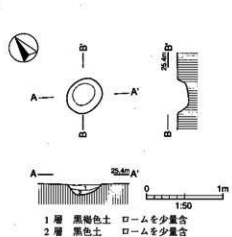
No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	130×64×38 ロク口成形 口縁外反 底部回転ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	赤褐色 淡褐色	菅	1/3	墨書「因」 体部外面
2	土師器 坏	130×60×39 ロク口成形 器形は全体的に歪んでいる 口縁外反 底部回転ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	淡褐色 菅	菅	略完形	墨書「大」 体部外面



- 1層 黒色土 ロームを微量含
- 2層 黒色土 径5mm大のロームブロック少量
- 3層 黒色土 ロームを少量含
- 4層 黒色土 ロームを微量含

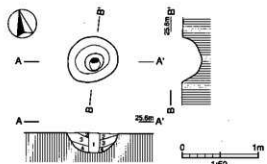


D112



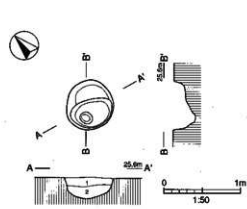
- 1層 黒褐色土 ロームを少量含
- 2層 黒色土 ロームを少量含

D113



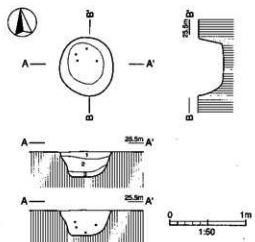
- 1層 暗灰褐色土 黒褐色土に白色粘土が混じった土。焼土粒微含
- 2層 黒褐色土 ローム粒及び焼土粒微含
- 3層 黒褐色土 ローム粒微含
- 4層 暗褐色土 ローム粒及び焼土粒微含

D120



- 1層 黒褐色土 ローム粒を多量含。径5mm大のロームブロック少量含
- 2層 黒褐色土 ローム粒を多量含。人為的堆積のピット

D114



- 1層 黒褐色土 ローム粒少量。焼土粒微含
- 2層 黒褐色土 ローム粒多量。焼土粒微含
- 3層 暗褐色土 ローム粒多量

D123

図146 D112・D113・D114・D120・D123

D112

検出地区 L7-34-4g、L7-44-1・2gにて検出した。

遺構 長軸1.81m×短軸1.65m×深さ0.39m、長軸方位はN-18°-Eを示す。平面形は隅丸方形であり、小規模な竪穴状である。坑底は平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。坑底の北コーナー付近に、浅く掘込まれたピットを検出している。覆土は、黒色土を主体とした自然堆積であった。遺物は、須恵器壺片が坑底等から出土していた。

所見 遺物から奈良・平安時代の土坑と捉えたが、小規模な竪穴状の遺構となっていた。

D113

検出地区 L7-55-3g、L7-65-1gにて検出した。

遺構 長軸0.46m×短軸0.45m×深さ0.14m、長軸方位はN-35°-Eを示す。平面形が、ほぼ円形の土坑である。坑底はやや丸みをもち、北東壁から南西壁にむけて、次第に下っていくものであった。壁は、坑底からやや急な傾斜を持って立ち上がっている。覆土は、黒色土と黒褐色土の自然堆積であった。遺物は出土していない。

所見 覆土の状況から奈良・平安時代の土坑と判断した。遺構としては小規模な土坑であり、本来は、単独の土坑というより、他の遺構に伴うものであったかもしれない。

D114

検出地区 L7-63-3gにて検出した。

遺構 長軸0.64m×短軸0.64m×深さ0.29m、長軸方位はN-15°-Eを示す。平面形は円形である。坑底は北東側にテラス状に段差を有し、坑底から更にピットを掘込んだ土坑である。覆土は、黒褐色土を支湯帯とした自然堆積である。遺物の出土はなかった。

所見 一見、掘立柱建物跡の柱穴を思わせ根のものである。そして柱穴の脇を掘って柱を引抜いた様な土坑であった。しかし覆土からはその痕跡がなく、用途不明の土坑と捉えざるを得なかった。威武は出土していないが、覆土の状況から奈良・平安時代の土坑と捉えた。

D120

検出地区 L-73-3gにて検出した。

遺構 長軸0.68m×短軸0.59m×深さ0.25m、長軸方位はN-76°-Eを示す。平面形は円形である。坑底はやや丸みを持つものの、柱痕が検出された土坑であるため、柱穴と捉えられたものである。覆土は暗褐色土と黒褐色土を主体としているが、柱痕の覆土は粘土粒子が混入していた。遺物は出土しなかった。

所見 柱痕が確認された柱穴であるが、どの掘立柱建物跡にも属さなかった。掘立柱建物跡としても他の柱穴がすべて確認できなかったとは考えられず、単独の柱の存在を集落遺構の中で検討すべきかもしれない。また、柱痕や柱穴覆土に粘土粒子が混入することは、上谷遺跡Ⅱ・Ⅳ地区の掘立柱建物跡群の調査で確認されており、このことから奈良・平安時代の所産と捉えた。

D123

検出地区 L7-64-2gにて検出した。

遺構 長軸0.79m×短軸0.73m×深さ0.31m、長軸方位はN-18°-Wを示す。平面形は円形である。坑底は平坦であり、その坑底から壁の南壁はやや湾曲し、北壁は急に立ち上がっている。覆土は、黒褐色土を主体とした自然堆積であり、覆土中層以下から土師器片が出土している。

所見 図示する程の大形片ではなかったが、遺物分布を掲示している。出土遺物から当該時代の所産と捉えているが、用途不明の土坑であった。

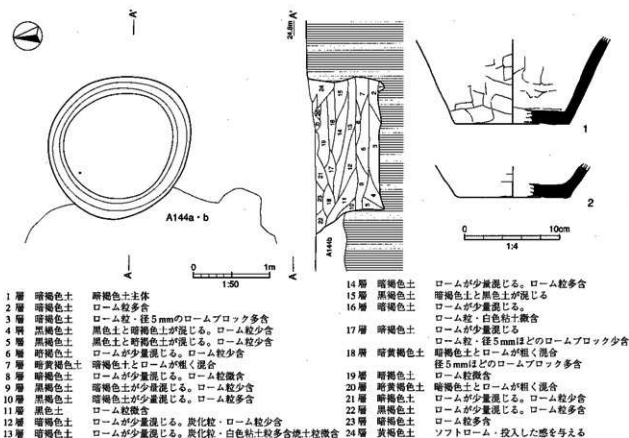


図147 D125

表69 D125遺物観察表

(単位mm)

№	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 甕	一×(120)×(92) 底部ヘラ削り 外面 胴下半・下端ヘラ削り 内面 胴下半ナデ 下端ヘラ削り	灰黒濁 青	砂粒 白色粒含	胴部～ 底部片	
2	須恵器 甕	一×一×一 ロクロ成形 底部回転ヘラ削り 外面 胴下端ヘラ削り 内面 胴下半ナデ	灰褐 良	砂粒 白色粒含	胴部～ 底部片	内面自然釉?

D125

検出地区 M6-95-3gにて検出した。

遺構 長軸1.97m×短軸1.79m×深さ0.97m、長軸方位はN-44°Eを示す。平面形はほぼ円形である。A157と重複している。坑底は平坦であり、壁の立ち上がりには周溝を持つ土坑である。覆土はロームを混入させた暗褐色土を主体とした人為堆積である。土師器2片が出土している。

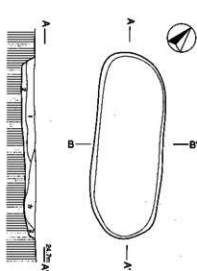
所見 覆土は、単に土砂を放り込んだような堆積である。形状から墓墳とも想定したが、覆土状況からそのようには捉えられないものである。

D128

検出地区 M7-13-4g、M7-23-2gにて検出した。

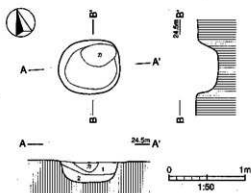
遺構 長軸2.46m×短軸0.93m×深さ0.15m、長軸方位はN-41°Wを示す。平面形は長楕円形である。平面規模に比して浅い土坑で、やや凹み状の遺構であった。遺構としては浅いものであるが、壁はほぼ垂直に立ち上がっており、坑底は平坦であった。覆土は黒色土の人為堆積であった。また、遺物は出土していない。

所見 用途不明の土坑である。覆土等から奈良・平安時代の土坑と捉えた。



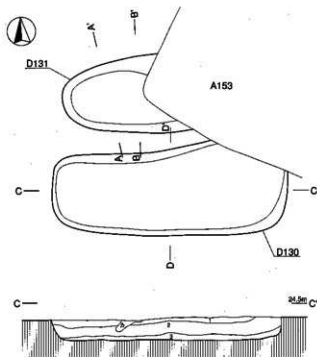
1層 黒色土 ローム粒少含
2層 黒色土 ローム粒多含

D128



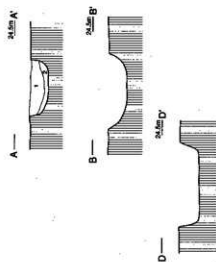
1層 黒褐色土 ローム粒多含。径5mm大のロームブロック少含
2層 黒色土 ローム粒少含

D132



1層 黒褐色土 ローム粒微含
2層 黒褐色土 ローム粒・径5mm大のロームブロック少含
3層 黒褐色土 ローム粒多含。径5mm大のロームブロック少含

D130・D131



1層 黒色土 ローム粒多含
2層 黒色土 ローム粒・径5mm大のロームブロック少含

図148 D128・D130・D131・D132

D130

検出地区 M7-11-3gにて検出した。

遺構 長軸3.10m×短軸1.21m×深さ0.29m、長軸方位はN-85°-Wを示す。平面形は長楕円形である。坑底はやや凹凸を持つが平坦であり、坑底から立ち上がる壁はほぼ垂直であった。遺構規模からすると浅い土坑である。覆土は、黒褐色土を主体とした自然堆積であった。遺物は、出土しなかった。

所見 D128と平面形や覆土等、類似する土坑である。覆土等から、奈良・平安時代と捉えているが、土坑の用途は不明である。形状の類似で単純には判断できないが、類似性を持つことは何らかの目的のもとに掘られたと考えている。なお、A153重複するが、本土坑の方が新しいと虎られている。

D131

検出地区 M7-11-3gにて検出した。

遺構 長軸(1.07)m×短軸1.00m×深さ0.24m、長軸方位はN-87°-Wを示す。平面形は長楕円形である。A128と重複しむ、D130と隣接した土坑である。形状や深さはD128やD131に類似している。坑底は平坦であり、坑底から壁はやや丸みを持って立ち上がり、その後はほぼ垂直に掘込み面に至っている。覆土は黒色土主体の自然堆積であった。遺物は出土していない。

所見 D128やD131と類似する土坑であると先述したが、近接して3基の類似土坑を検出したものである。覆土の状況から、奈良・平安時代としたが、不明な点も多い遺構である。類似性を持つことがどんな目的であったかは判然としないが、しかも近接することによってつくられた土坑には、目的があったのではないかと考えている。類例の増加を待ちたい。

D132

検出地区 M7-21-3gにて検出した。

遺構 長軸0.81m×短軸0.73m×深さ0.28m、長軸方位はN-79°-Wを示す。平面形は隅丸形状となっている。坑底は略平坦であり、壁は坑底から彎曲した後、やや開いて急激に立ち上がっている。覆土はロームを含んだ黒色土・黒褐色土であり、人為的な堆積を窺わせていた。遺物は出土しなかった。

所見 覆土の堆積状況等から掘立柱建物跡の柱穴とも想定したが、判然としないため、土坑として扱った遺構である。

D139

検出地区 L7-9-1gにて検出した。

遺構 長軸1.30m×短軸1.25m×深さ0.26m、長軸方位はN-34°-Wを示す。平面形は円形である。一見、盤状の土坑である。坑底はやや凹凸をもちながらもほぼ平坦であり、壁はやや坑底から丸みを持って立ち上がっている。覆土は黒褐色土の自然堆積であり、遺物は出土しなかった。

所見 一見、縄文時代の小堅穴に見えるが、覆土等から奈良・平安時代の土坑と判断した。遺物もなく不明瞭な土坑である。

D140

検出地区 L7-9-1gにて検出した。

遺構 長軸0.74m×短軸0.63m×深さ0.19m、長軸方位はN-47°-Wを示す。平面形は円形である。坑底は凹凸がある床で、壁は坑底からやや丸みを持って立ち上がっている。覆土は、ロームの包含や色調で捉えたが、人為堆積であった。遺物は出土していない。

所見 坑底の凹凸がやや激しい土坑である。遺物が出土していないので判断材料に欠けているが、覆土から奈良・平安時代の土坑と捉えた。

D141

検出地区 L7-9-4gにて検出した。

遺構 長軸0.72m×短軸0.63m×深さ0.19m、長軸方位はN-47°-Wを示す。平面形は、ほぼ円形である。坑底は西壁から東壁際にむけてゆるやかに下るもので、西壁側は壁はゆるやかに立ち上がるが、東壁側は急に立ち上がり、ほぼ垂直に近くなっていた。覆土は、黒褐色土が主体となった自然堆積であった。また、覆土は西側から流れ込んだことが、捉えられている。遺物の出土はなかった。

所見 断面形で見ると、西側から掘込んだ様な土坑である。そして西側から、埋まっていった様な土坑である。遺物等の出土がないため、判断材料に乏しいが、覆土から奈良・平安時代の土坑と捉えている。

D142

検出地区 L7-9-3gにて検出した。

遺構 長軸0.70m×短軸0.68m×深さ0.231m、長軸方位はN-52°-Eを示す。平面形は、ほぼ円形である。坑底は平坦さを意識せず、丸底となっている。壁と坑底の境は不明瞭であり、壁の立ち上がりはやや急な斜めであった。覆土は黒色土を主体とした自然堆積であり、包含するローム粒の多寡で分層した。遺物の出土はなかった。

所見 本土坑も10調査区の検出であるが、D140以降に平面形は略円形で、坑底の平坦さを意識しない土坑の検出が多い傾向にある。D140以降は比較的近接した遺構であり、類似性を持つ土坑と言える。失われた他の遺構と関連するかもしれないが、発掘調査時においてはそれに類する遺構も捉えられなかった。類似する本土坑についても、類例の増加をまって検討すべきかもしれない。

D143

検出地区 L7-9-3gにて検出した。

遺構 長軸0.52m×短軸0.44m×深さ0.23m、長軸方位はN-25°-Eを示す。平面形は、やや円形に近い楕円形である。南北に長軸を持つ土坑である。本土坑も坑底の平坦さを意識しないもので、坑底から壁は丸く立ち上がっている。しかし、壁の立ち上がりは、ほぼ垂直に近くなっていた。覆土は色調及びロームの包含の多寡で捉えたが、西壁から入り込んだ自然堆積であった。遺物は出土していない。

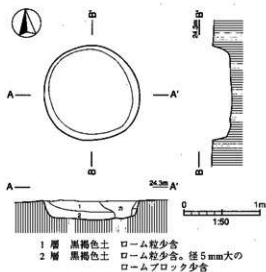
所見 本土坑も16調査区の検出である。坑底はやや尖底気味となっており、平坦さは意識されていない。壁は坑底から丸みを帯びて立ち上がっており、壁では急に立ち上がるものであるが、掘込んだ方向によって若干の差が生じている。

D144

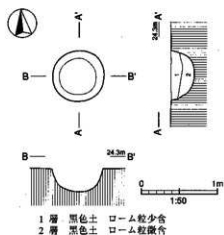
検出地区 L7-7-4gにて検出した。

遺構 長軸0.75m×短軸0.68m×深さ0.47m、長軸方位はN-12°-Eを示す。平面形は、円形に近い楕円形である。本土坑も坑底を意識せず、やや尖底気味の坑底である。壁から坑底は丸みを持って、壁自体はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は黒褐色土を主体としているが、最下層は暗黄褐色土であった。人為堆積の様相を見せている。遺物は出土していない。

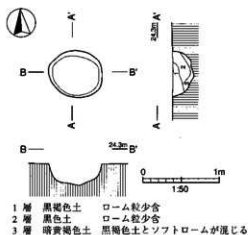
所見 柱穴の柱を引抜いた様な覆土堆積であり、再堆積の状況を示している。覆土から掘立柱建物跡の可能性も検討すべきかもしれない。しかし現状では、用途不明の土坑として報告することとした。覆土から、奈良・平安時代の所産と捉えている土坑である。



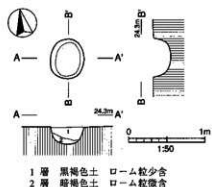
D139



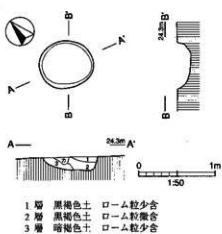
D142



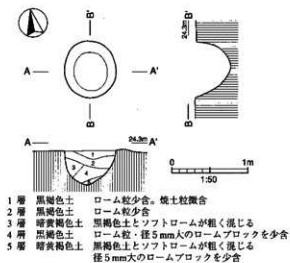
D140



D143

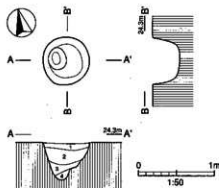


D141



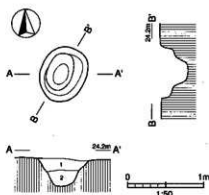
D144

図149 D139・D140・D141・D142・D143・D144



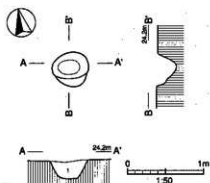
- 1層 黒褐色土 ローム粒少含
 2層 黒色土 ローム粒少含
 3層 黒色土 ローム粒・径5mm大のロームブロック少含
 4層 黒褐色土 ローム粒多含

D145



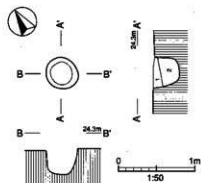
- 1層 黒色土 ローム少含
 2層 黒色土 ローム粒嵌合径5mm大のロームブロック

D146



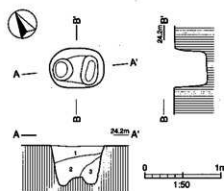
- 1層 黒褐色土 ローム粒少含

D147



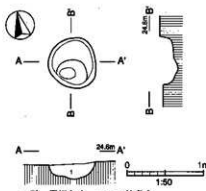
- 1層 黒色土 ローム粒少含
 2層 黒色土 ローム粒嵌合

D148



- 1層 黒褐色土 ローム粒少含。白色粘土粒・洗土粒嵌合
 2層 黒色土 ローム粒少含。白色粘土粒・洗土粒嵌合
 3層 黄褐色土 ソフトローム主体。黒色土が極少量混じる

D149



- 1層 黒褐色土 ローム粒多含

D152

図150 D145・D146・D147・D148・D149・D152

D145

検出地区 L7-17-2g、L7-18-1gにて検出した。

遺構 長軸0.63m×短軸0.61m×深さ0.50m、長軸方位はN-15°-Eを示す。平面形はほぼ円形である。坑底の北西壁寄りには、坑底を更に掘込んだピットが検出された。一段高い坑底は、やや丸みを持つが平坦であり、壁には丸みを持って移行し、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は黒色土を主体とした自然堆積であるが、柱穴覆土に近似する。遺物は出土しなかった。

所見 本土坑も10調査区の検出である。D140以降の各土坑と近似するものである。覆土から、奈良・平安時代の所産と捉えている。

D146

検出地区 L-17-2gにて検出した。

遺構 長軸0.73m×短軸0.60m×深さ0.36m、長軸方位はN-31°-Eを示す。平面形は円形である。坑底は平坦であるが、断面段差を持って掘込まれており、壁はやや斜めに立ち上がっている。覆土は黒色土を主体として、自然堆積であった。遺物は出土していない。

所見 本土坑もD140等と近似する遺構であり、掘立柱建物跡が掘り返され崩れた様な土坑であった。覆土から、奈良・平安時代の所産とした。

D147

検出地区 17-17-2gにて検出した。

遺構 長軸0.46m×短軸0.46m×深さ0.26m、長軸方位はN-79°-Wを示す。平面形は楕円形である。坑底を意識しない土坑であり、尖底気味のものである。壁は斜めに立ち上がっている。覆土は、黒褐色土の1層であり、自然堆積か人為堆積か判断できなかった。遺物は出土していない。

所見 覆土堆積が気になるが、D140等と近似する土坑である。覆土から、奈良・平安時代の所産と捉えている。

D148

検出地区 L7-87-3g、97-1gにて検出した。

遺構 長軸0.43m×短軸0.41m×深さ0.34m、長軸方位はN-28°-Wを示す。平面形は円形である。断面円柱状を示しており、坑底は平坦であった。壁は、ほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は黒色土を主体とした、自然堆積である。遺物は出土はなかった。

所見 本土坑は底部を意識し坑底が平坦な遺構である。覆土から奈良・平安時代の所産と捉えた。

D149

検出地区 L7-6-4gにて検出した。

遺構 長軸0.72m×短軸0.53m×深さ0.54m、長軸方位はN-58°-Wを示す。平面形は隅丸長方形である。東壁及び西壁際に、坑底から更に2基ピットを掘込んでいる土坑である。覆土は東側からの流入とした、黒褐色土を主体とした自然堆積である。遺物は出土しなかった。

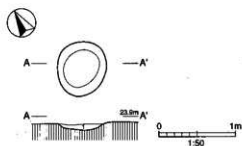
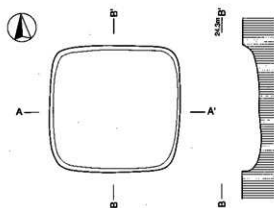
所見 坑底を掘なおしたような土坑である。奈良・平安時代の所産と捉えた。

D152

検出地区 L7-3-4g、L7-13-2gにて検出した。

遺構 坑底が丸くなった土坑である。壁はやや斜めに立ち上がっている。覆土は黒褐色土1層であった。遺物は出土していない。

所見 坑底から、更に南壁際にピットを掘込んだ土坑である。基本的には、坑底の平坦さは意識されていない土坑でもある。奈良・平安時代の所産と捉えている。



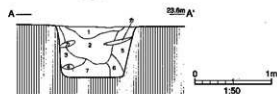
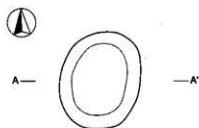
1層 黒褐色土 ローム粒を少含。焼土粒・炭化粒微含

D158



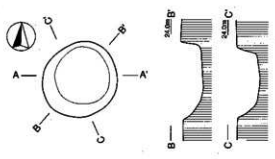
- 1層 黒褐色土 ローム粒少含
- 2層 黄褐色土 ソフトロームブロック
- 3層 黒褐色土 1層よりも暗い。ローム粒少含
径5mm大のロームブロック少含を極微量含
- 4層 黄褐色土 ソフトローム主体。黒色土が微量混じる

D151



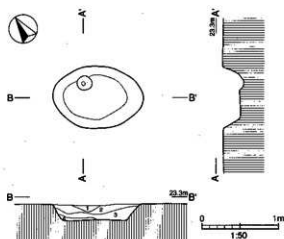
- 1層 褐色土 径2~3mmの黄色粒子多含
- 2層 褐色土 径1~5mmの黄色粒子・ブロック含
- 3層 褐色土 ローム土主体
- 4層 暗褐色土
- 5層 褐色土 ローム上主体
- 6層 褐色土 根のカクラン
- 7層 褐色土 ローム土主体

D160



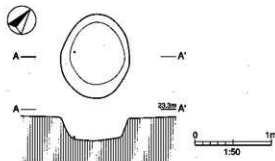
- 1層 暗褐色土 微細な焼土粒・炭化材含汚れたローム混じる
- 2層 暗黄褐色土 微細な焼土粒・炭化材含汚れたローム混状含
- 3層 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒含
- 4層 暗黄褐色土 暗黄褐色土主体
- 5層 暗黄褐色土 暗黄褐色土主体
- 6層 暗黄褐色土 汚れたローム主体層に黒色土が斑状に混じる

D154



- 1層 暗褐色土 均質な土
- 2層 暗褐色土 褐色土が混じる
- 3層 黒褐色土 暗褐色土とロームが混じる
- 4層 褐色土 ローム主体とした土

D173



D172

図151 D151・D154・D158・D160・D172・D173

D151

検出地区 L6-94-3gにて検出した。

遺構 長軸1.73m×短軸1.68m×深さ0.25m、長軸方位はN-85°-Wを示す。平面形は方形である。坑底はやや凹凸あるもので、坑底から壁へ丸く立ち上がり、壘時代は斜めから垂直であった。堅穴状の遺構である。覆土は色調及び包含物によって捉えたが、自然堆積で埋没したものである。遺物は出土しなかった。

所見 方形の堅穴状の遺構である。覆土より、奈良・平安時代の遺構と捉えたが、やや新しい時期の所産かもしれない。

D154

検出地区 L6-67-2gにて検出した。

遺構 長軸1.60m×短軸1.55m×深さ0.48m、長軸方位はN-2°-Wを示す。平面形はほぼ円形である。北東壁がほぼ垂直に立ち上がり、南西壁はやや緩く立ち上がる壁で、坑底は平坦な土坑である。覆土は層によって異なるがローム含んでおり、更に複雑な堆積を示している。しかし覆土からみると掘返しがあり、人為堆積によるものと捉えた。坑底等には掘返しの痕跡は窺われなかった。遺物は出土していない。

所見 平面及び断面は単純な形状を示しているが、しっかりとロームを掘込んだ土坑である。調査時は火床の検出を考慮していたが、確認されず、遺物もなかったが、掘込みがしっかりとしたものであったことから、遺構として捉えた。掘返し行為がどのような目的であったかは、遺物が出土していないため判然としないが、覆土の状態等から奈良・平安時代の所産と捉えた。

D158

検出地区 L7-80-1・3gにて検出した。

遺構 長軸0.70m×短軸0.64m×深さ0.08m、長軸方位はN-32°-Eを示す。平面形は楕円形である。凹み状の土坑で、覆土は1層しか捉えることができなかった。坑底はやや凹凸あるもので、坑底を意識しておらず、皿状となって、壁は次第に立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

所見 形状は今まで報告して土坑と近似するが、土坑の浅さから別種のものだと判断している。覆土から奈良・平安時代の土坑として捉えたが、用途等は不明の土坑である。

D160

検出地区 K6-37-4gにて検出した。

遺構 長軸1.31m×短軸1.05m×深さ0.68m、長軸方位はN-21°-Eを示す。平面形は、楕円形である。円筒状の土坑である。掘込みが深く、坑底は平坦であった。壁は垂直に近い状態であった。覆土は複雑な堆積を示し、人為的な堆積であったと捉えられた。そして埋没した土坑を、掘返している様子も窺えた。遺物は出土しなかった。

所見 用途不明の土坑であるが、掘込みはしっかりとしており、坑底はハードロームであった。複雑というより、乱雑な覆土の堆積状況は、充填したようでもあり、掘返したようでもあった。掘返しと捉えたが、不明瞭な堆積状況ではある。遺物が出土していないので、時代決定に躊躇するが、覆土の色調等から奈良・平安時代の所産と捉えることとした。

D172

検出地区 K6-58-1gにて検出した。

遺構 長軸1.12m×短軸0.91m×深さ0.32m、長軸方位はN-39°-Wを示す。平面形は卵形である。坑底は略平坦であり、壁は斜めに立ち上がっている。遺物の出土はなかった。

所見 土層堆積図を誤って実測しなかった土坑であるが、遺構の形状等から、奈良・平安時代の所産とした。しっかりとした掘込みであった。

D173

検出地区 K6-57-2gにて検出した。

遺構 長軸1.20m×短軸0.81m×深さ0.24m、長軸方位はN-52°-Eを示す。平面形は卵形である。坑底の北側に、更に浅いピットを掘込んでいた。坑底は平坦であり、壁は斜めに立ち上がっている。また、北壁側に少ピットが掘込まれていた。覆土は、黒褐色土を中心とした自然堆積であった。遺物は出土しなかった。

所見 全体として、しっかりとした掘込みの土坑である。覆土等から奈良・平安時代の所産と捉えたが、判断材料に乏しい遺構であった。4層は掘すぎであったかもしれない。

D174

検出地区 K6-45-4gにて検出した。

遺構 長軸0.82m×短軸0.56m×深さ0.34m、長軸方位はN-71°-Eを測る。平面形は不整形であるが、坑底では楕円形に近いものである。坑底は、更に一段下がって掘込まれていた。覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積であった。

所見 時代を決定するのに、判断材料の乏しい土坑である。覆土の状況から縄文時代乃至中世以降の所産とも捉えられるが、遺構の検出状態等から当該時期の所産とした。なお、覆土3層は掘り過ぎあったかもしれない。

D177

検出地区 K6-56-3g、66-1gにて検出した。

遺構 長軸1.17m×短軸1.09m×深さ0.42m、長軸方位はN-5°-Eを示している。平面形はやや歪んだ方形である。坑底は平坦であり、しっかりした掘込みのある土坑である。覆土は、ロームを含んだ暗褐色土を主体とした人為堆積であった。

所見 覆土の状況等から、奈良・平安時代の所産と捉えた。

D179

検出地区 K6-76-3gにて検出した。

遺構 長軸1.21m×短軸0.73m×深さ0.23m、長軸方位はN-80°-Wを測る。平面形は隅丸長方形である。坑底は平坦であり、壁は坑底からやや斜めに立ち上がっている。覆土は褐色土・暗褐色土を主体とした自然堆積であった。む

所見 比較的整然とした形状の土坑である。遺構の状況から当該時代の所産と判断した。

D181

検出地区 K6-89-2gにて検出した。

遺構 長軸1.88m×短軸1.53m×深さ1.44m、長軸方位はN-19°-Wを示している。

平面形は確認面では楕円形であるが、中場では長方形となっている。坑底も長方形であり、平坦なものとなっていた。壁にはオーバーハングは認められなかった。覆土の堆積状況は縄文時代の陥穴に近似している。

所見 覆土の堆積は崩壊ロームの流入等、縄文時代の陥穴に近似しているが、平面形の規格性等、新しい時代の所産を物語っている。調査時には墓塚とも想定されたが、該当遺物の出土がなく、また、近似する例が墓塚にはないこと等から、用途不明の土坑とした。出土遺物がないたため、時代決定に躊躇があるが、奈良・平安時代の所産と捉えておきたい。

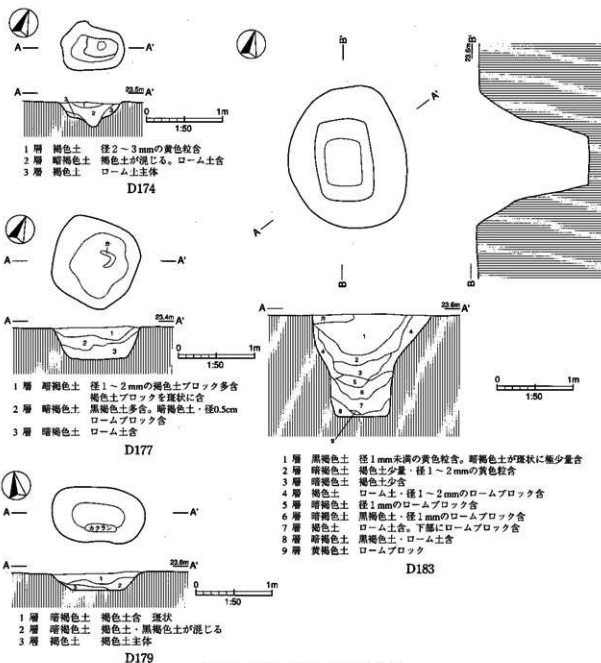


図152 D174・D177・D179・D183

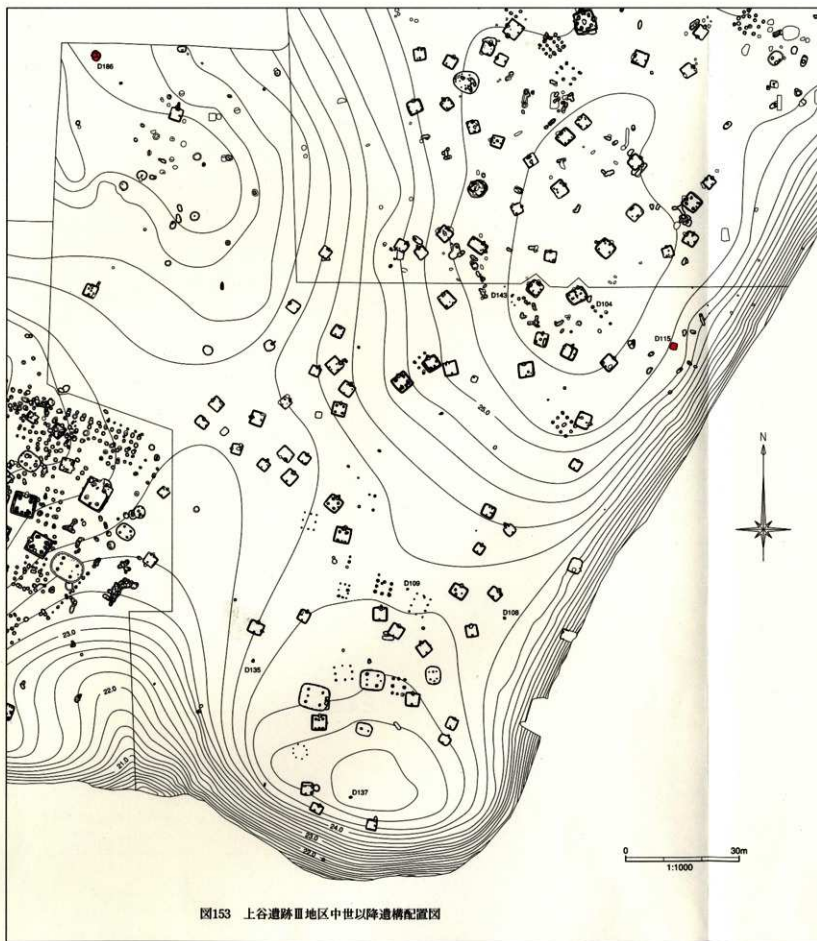


图153 上谷遗址Ⅲ地区中世以降通渠配置图

第4節 中世以降

本節では、中世及び中世以降に属すると考えられる遺構を報告する。また、縄文時代から奈良・平安時代に属するかも知れないが、その属する時代を明確にできない遺構も本節で扱うこととした。特に本節で扱う遺構は、主に遺物の出土がないか、出土していても後世の流れ込みと捉えられたものであり、このため所屬時代・時期を中世・近世と区分できるものではなかった。そして遺構の一部は、近代に及んでいると考えられるものである。

検出された遺構は総数10基であり、内訳は土坑8基、炭窯2基であった。土坑の用途は不明であり、炭窯も生産用というより自家消費分用の構造・規模であった。遺構分布については、対象とした検出遺構数が少ないため特徴は無く、Ⅲ地区に点在するものである。

以下に、中世以降の遺構について報告していくが、遺構数が少ないため遺構種別ではなく、まとめて報告することとした。

D103

検出地区 L7-52-1gにて検出した。

遺 構 長軸0.91m×短軸0.51m×深さ0.11m、主軸方位はN-43°-Eを示している。平面形は、歪な長楕円形である。坑底の平坦さは意識されず、ソフトロームを浅い皿状に掘込んだ不明瞭な土坑であった。覆土は褐色土の自然堆積後、焼土粒子を少し含み淡く赤色化下褐色土が堆積していた。本遺構から、出土遺物は無かった。

所 見 時代・時期の手掛かりとなる出土遺物が無く、中世以降の所産となった土坑である。また、発掘調査時から不明瞭な土坑であり、覆土等から縄文時代の遺構とも考えられたが、断定はできなかった。

D104

検出地区 L5-52-1gにて検出した。

遺 構 長軸0.88m×短軸0.85m×深さ0.37m、主軸方位はN-4°-Wを示している。平面形は円形であり、しっかりとした掘込みの土坑である。壁は平坦な坑底から、ほぼ垂直に立ち上がっていた。覆土は褐色土中心に複雑な堆積をしており、また、各層にローム粒の包含が認められ、人為的な埋戻しとして捉えられた。出土遺物は無かった。

所 見 やはり時代・時期の手掛かりとなる出土遺物が無く、中世以降の所産となった土坑である。しかし本土坑はしっかりとした掘込み等から、新しい時期の所産と考えられるものでもあった。覆土から人為的な土の充填と埋戻しが捉えられた。

D106

検出地区 L7-72-2にて検出した。

遺 構 長軸0.78m×短軸0.75m×深さ・深底部0.47m、浅底部0.33m、主軸方位はN-19°-Wを示している。平面形は歪な円形であり、2段階に掘込まれた土坑である。坑底はそれぞれ平坦であり、壁は坑底からはほぼ垂直に立ち上がっていた。覆土は、暗褐色土と褐色土であるが、人為的な堆積を窺わせるものであった。出土した遺物は極めて少なく2点のみであった。縄文の深鉢胴部片であったが、後世の流入と考えられた。

所 見 時代・時期の手掛かりとなる出土遺物が無かった。坑底南側はテラス状というより、ステップ状のものであった。

D108

検出地区 L7-50-4gにて検出した。

遺構 長軸0.75m×短軸0.61m×深さ0.07m、主軸方位はN-50°-Wを示している。平面形は略円形である。ソフトロームを掘込んだ浅い皿状の土坑であり、坑底は平坦であった。壁は南東壁側が緩やかに、北西壁側がやや急に立ち上がっていた。覆土は、ローム粒や炭化粒を含む黒褐色土であった。土坑に深さがいないため、覆土が自然堆積か人為的投入か判断できなかった。遺物の出土は無かった。

所見 時代・時期の手掛かりとなる出土遺物が無く、中世以降の所産となった土坑である。包含された炭化粒については、直接的に本遺構での火の使用は捉えられず、周辺からの流入か人為的な埋戻しによる包含かも捉えられなかった。

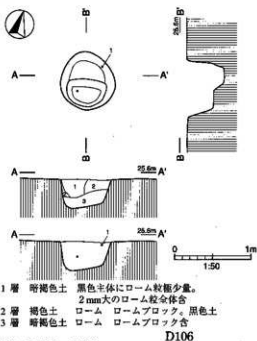
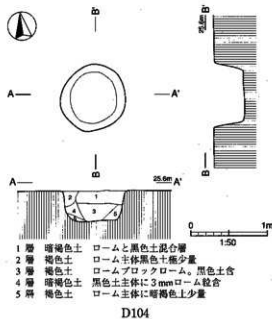
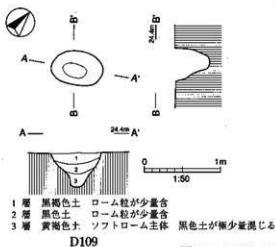
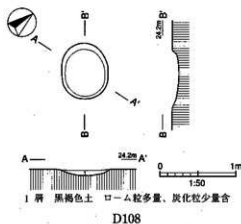
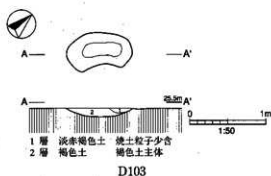


図154 D103・D104・D106・D108・D109

D109

検出地区 L7-30-1gにて検出した。

遺構 長軸0.68m×短軸0.45m×深さ0.45m、主軸方位はN-59°-Eを示している。平面形は楕円形であるが、平面規模に比べ深さのある土坑である。壁はほぼ垂直に立ち上がっているが、西壁は崩れがあるのか屈曲して立ち上がっている。覆土は最下層にソフトローム主体の黄褐色土が堆積するが、中層以上は黒色土を主体としたものであった。いずれも自然堆積である。遺物は縄文時代早期・条痕文土器の小片が1点のみ出土した。

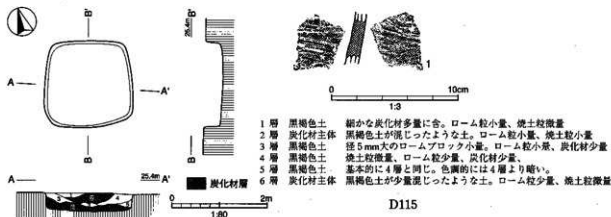
所見 遺物の出土から縄文時代早期の土坑とも捉えられるが、覆土の特徴が異なり時代不明の遺構として捉えた。

D115

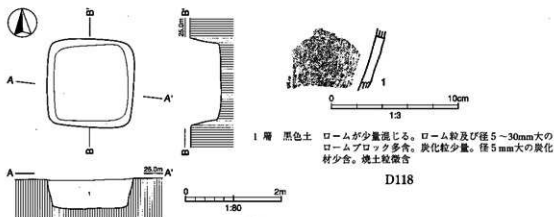
検出地区 L7-93-2gにて検出した。

遺構 長軸1.85m×短軸1.85m×深さ0.37m、主軸方位はN-72°-Eを示している。平面形はほぼ方形である。ハードロームのたしょうの凹凸がある坑底であり、その坑底から壁がほぼ垂直に立ち上がり、壁の崩れは殆どなかった。遺構内からは多量の細かな炭化材が出土したが、坑底や壁には焼けた痕跡は認められなかった。焼土粒が炭化材に混入して、認められる程度であった。覆土は炭化材主体層と黒褐色土が複雑に堆積しており、本遺構の用途が終了した時点で人為的な投入による埋戻しが行われていた。遺物は縄文時代早期・条痕文系土器片が1点のみ出土しているが、人為的な投入土とともに流れ込んだものと考えられた。

所見 炭窯と捉えられる土坑である。生産・出荷用の炭窯というより、自家消費分を焼いた簡易な炭窯と考えられるものである。



D115



D118

図155 D115・D118

D118

検出地区 L7-46-3g、L7-56-1gにて検出した。

遺構 長軸1.87m×短軸1.81m×深さ0.63m、主軸方位はN-9°-Eを示している。平面形は方形である。ハードロームの坑底は平坦で、壁は坑底より急激に立ち上がっている。坑底から壁の中位にかけて火熱を被った痕が認められた。このうちの一部は赤化していた。覆土には焼土粒・細かな炭化材を含んでおり、人為的に一気に埋戻されたものである。このため覆土を分層することが、極めて難しい堆積状態であり1層のみの把握であった。遺物は縄文時代早期・燃糸文土器片が出土しているが、本遺構の人為的な埋戻し時に伴う流れ込みである。

所見 D115と同様の炭窯である。炭を生産・出荷用に炭を焼いたのではなく、簡易に自家消費分を焼いた炭窯であろう。炭窯と呼ぶより、「炭穴」とした方が的を得ているようにも思える遺構である。上谷遺跡Ⅱ地区においても同様の遺構が検出されており、上谷遺跡のかつての土地利用形態を窺い知る遺構でもある。

D135

検出地区 M6-81-2g、M6-82-1gにて検出した。

遺構 長軸0.92m×短軸0.73m×深さ0.16m、主軸方位はN-16°-Eを示している。平面形は歪んだ卵形である。ソフトロームを掘込んだ浅い凹み状の土坑であり、特に坑底を意識して掘込んだ様子は窺えなかった。壁は坑底からひらくように、なだらかに立ち上がっている。遺構検出時に、滲むように焼土が確認されている。覆土は、暗褐色土の自然堆積である。そして覆土上層で、僅かに火の使用の痕が認められた。遺物は出土しなかった。

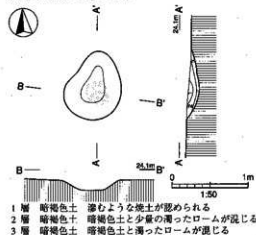
所見 発掘調査当初は炉穴の可能性も想定していたが、被熱の痕跡も炉穴と異なるため時期不明の土坑と捉えなおした土坑である。覆土等から縄文時代の遺構の可能性も否定しきれないが、断定する資料に乏しく中世以降の遺構として扱うことにした。

D137

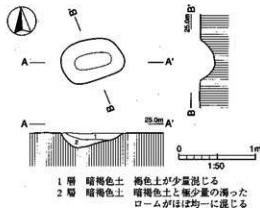
検出地区 M7-5-4gにて検出した。

遺構 長軸0.83m×短軸0.57m×深さ0.19m、主軸方位はN-87°-Wを示している。平面形は隅丸長方形である。あまり坑底を意識していない様な土坑であるが、西壁側が深く、東壁側に向かって次第に立ち上がっていく壁となっている。覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積であった。遺物は、本遺構に関係するものはなかった。

所見 用途や、時代・時期が捉えきれない土坑である。覆土等から縄文時代の土坑かとも、判断が迷うものであった。



D135



D137

図156 D135・D137

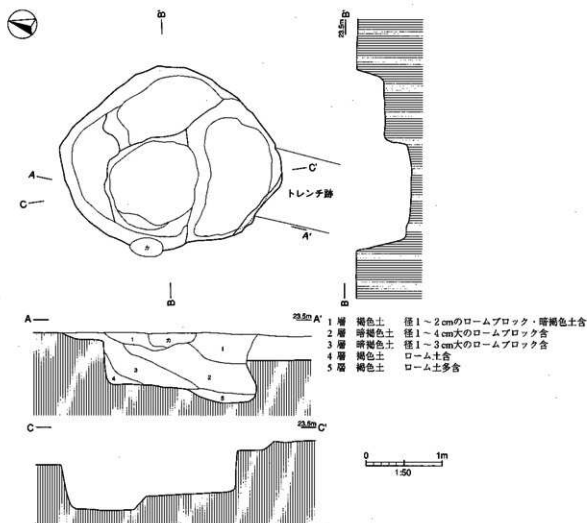


図157 D184

D184

検出位置 K6-35-4g、K6-36-3g、K6-45-2g、K6-46-1gにわたって検出した。

遺構 長軸2.98m×短軸2.47m×最深部0.73m、主軸方位はN-11°-Wを示している。平面形は不整形である。旧石器時代の確認調査において検出された土坑であるが、遺構確認時には再堆積したようなロームが認められたため、風倒木痕とも考えた土坑である。

土坑は北壁側から南壁側にかけて、段状に4カ所の高低差をもつ坑底であり、次第に低くなっていく。しかし円形や方形といった明瞭な形状ではなく、それぞれ不整形な形状となっていた。壁の立ち上がりは各壁ともほぼ垂直に近いものであったが、南壁の一部にオーバーハングした部分が出されている。覆土はロームを多く含む褐色土と暗褐色土が主体であるが、北壁側からの人為的な投入であった。覆土には、大きなローム塊は認められなかった。遺物は、出土していない。

所見 発掘調査時においては、本土坑が中世の地下式塚かとも想定された。しかしソフトローム上面から坑底までの深さが無いこと、地下式塚とすれば出入口となるであろう堅穴の径が大きすぎること、崩落したであろう天井部の厚い板状のロームが覆土に認められないこと等から、地下式塚とは認められなかった。南壁にオーバーハングしている部分を認めるので墓塚とも思えるが、坑底直上層には有機質の腐食で生じるであろう黒色土の堆積はなく、不明な点が多い土坑である。

出土遺物もなく、時期不明及び用途不明の土坑として報告するが、類例の増加をまって検討する必要があるだろう。

第3章 小 結

以上、上谷遺跡Ⅲ地区の調査によって得られた成果を報告してきた。上谷遺跡は5分冊によって報告するため、遺跡の全容が見えにくいものとなっている。特に縄文時代の早期・炉穴群や中期初頭の遺構群、弥生時代の集落跡、また、奈良・平安時代の竪穴住居跡と掘立柱建物跡群等は、全地区に渉るためその傾向は顕著である。ここではⅢ地区の概要についてまとめていきたい。

第1節 縄文時代

縄文時代の遺構は、早期・条痕文期の炉穴と中期初頭の遺構群であった。また、早期・燃糸文土器片も数多く出土していた。特に燃糸文土器に伴う遺構検出されていないため、各時代の遺構が形成されこれによって失われていったものと想定している。

Ⅲ地区の縄文時代をまとめるにあたって、ここでは早期・条痕文系の炉穴と中期初頭の遺構群について若干触れてみたい。

第1項 炉 穴

上谷遺跡の条痕文土器は大きく野島式土器と茅山下層に分かれると捉えられるが、本遺構も全地区に及んでいるため、時期的な把握は最終段階で行いたいと考えている。ここではⅢ地区の炉穴の検出状況について、若干のまとめを行いたい。

Ⅲ地区では、炉穴を25基検出した。複数の火床を持つ遺構があり、また、複合した炉穴もあるので実数はそれ以上と思われるが、Ⅱ地区の106基に比べ、極端な減少となっている。炉穴の検出位置はⅢ地区の北東地区が主体を占めており、これはⅡ地区の炉穴群広がりとして捉えることができよう。そしてその遺構分布は16調査区南側であり、遺構群としてもⅡ地区と直接的に繋がるものであった。

Ⅱ地区での炉穴の分布状況は、東群と西群の大きく二つにまとめることができたが、本地区の北東の炉穴群はこのⅡ地区の西群から延びてくる分布域に吸収されるものである。もとより、この群把握は土器の分析を通して行わなければならないが、視覚的な分布領域を捉えるときには有効手段であると思われる。この西群もまた、いくつかの小群に分かれるが、本地区では25基の検出のうち21基がこの地区に集中している。このため、Ⅲ地区の他の調査区では検出しないも同然の遺構分布状況となっている。

また、19調査区西側と15調査区東側に若干の炉穴の検出があるが、16調査区西側もⅡ地区の流れであり、15調査区東側のみが一見、単独で出現するように見える。しかしこれはⅣ地区への炉穴群の始まりであり、本地区の炉穴群は大きなⅡ地区炉穴群とⅣ地区・Ⅴ地区群の大きな遺構群の中の空白帯となっている状況である。

それでも奈良・平安時代の竪穴住居跡の覆土からは数多くの条痕文土器片が出土しており、生活領域として本地区を捉えていたはずであるが、当該時期の遺構数の激減ともいえる状態については、炉穴を掘込む場所として選定されていなかったかと思えるほどである。炉穴の分布状況の解析については、上谷遺跡全地区及び同一台地状に所在する栗谷遺跡の炉穴群とのかかわりのなかで捉える必要があると考えているが、やはりⅡ地区に比し、極端に減少した本地区の炉穴が目についてしまうものである。

いづれにしても今後の整理の中で、野島式と茅山下層式に伴う炉穴の分類と土器の分析を通して、上谷遺跡の早期・条痕文期の姿を明らかにしていきたいと考えている。なお、瞥見であるが、鶴ヶ台式土器片の出土が稀であり、時間的に空白となる傾向が指摘できるものである。

第2項 中期初頭の遺構について

上谷遺跡Ⅱ地区においての報告書の中で、縄文時代中期初頭の土坑であるD044を報告しているが、この土坑は小破片すぎたために土器の揭示はできなかった。小堅穴の土坑であるが、19調査区東側から検出した土坑であった。今回、本報告書にて報告したⅢ地区では、19調査区西側を中心に当該時期の住居跡を含む遺構を検出し、報告したところである。Ⅳ地区においても中期初頭の堅穴住居跡を検出しており、土器及び集落としてのまとめはそれを待って行いたい、ここではⅢ地区の当該時期の概要についてまとめておくこととする。

Ⅲ地区の調査においては当該時期の遺構は、堅穴住居跡3軒と堅穴状遺構を含む土坑が5基検出している。また、上谷遺跡の当該時期の住居跡及び堅穴状遺構は、一見、壘状であり、形状としてやや特異なものであった。その分布傾向は図に示したとおりだが、栗谷遺跡から入り込む谷津の谷頭付近に分布することが指摘でき、集落としての把握が可能と考えている。土坑のうち堅穴状遺構が3基あり、これには住居としての明確な床の硬化面や、炉跡などが検出されないものも含めば、住居跡として捉え直すことも可能であり、住居跡軒数が増加する可能性もある。

遺構からの遺物の出土は少なく、若干の土器片と石器であったが、黒曜石剥片や碎片の出土が多いことが確認されている。出土した土器は五領ケ台式土器であるが、利根川下流域の複合口縁を持つ土器群の出土は今のところ確認されていない。

当該時期の遺跡は千葉県内では少なく、また、八千代市域でも土器片の出土は僅かながらあるものの、集落としての検出は市域では初めてであった。印旛沼周辺でもそれは同じであり、今回の集落としての上谷遺跡の当該時期の遺構は、今後の研究の資料となろう。

出土した土器は五領ケ台式のうちⅠ式からⅡ式に涉っていると思われる。しかしⅣ地区の五領ケ台式土器若干の時間差があるようで、土器についてはその報告と共にまとめてみたいと考えている。

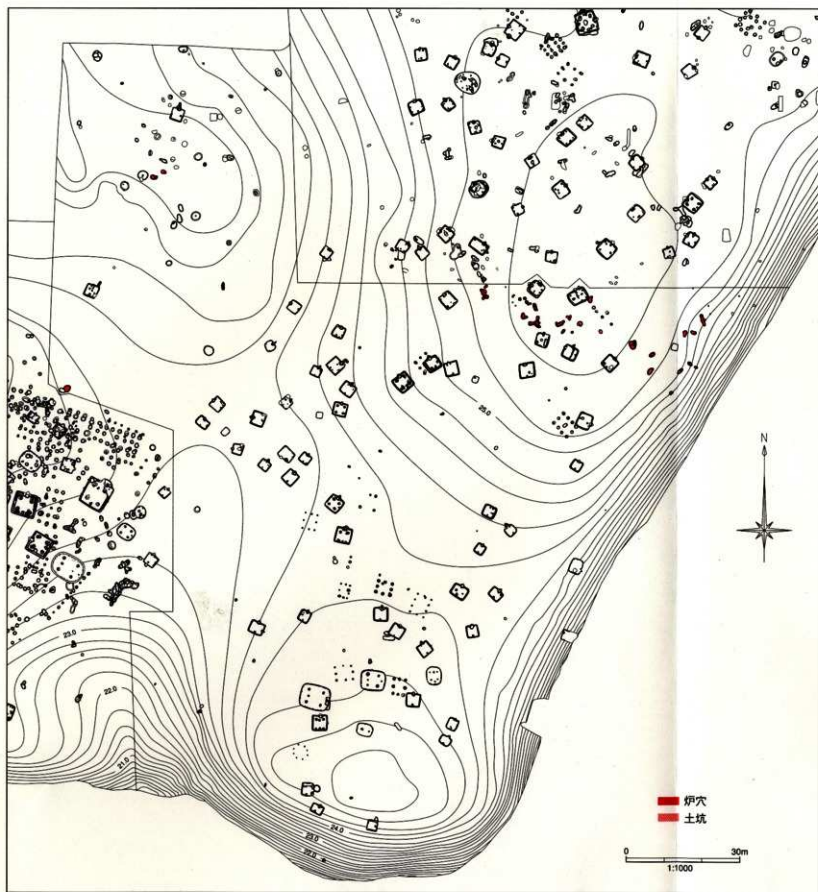


图158 縄文時代早期遺構配置図

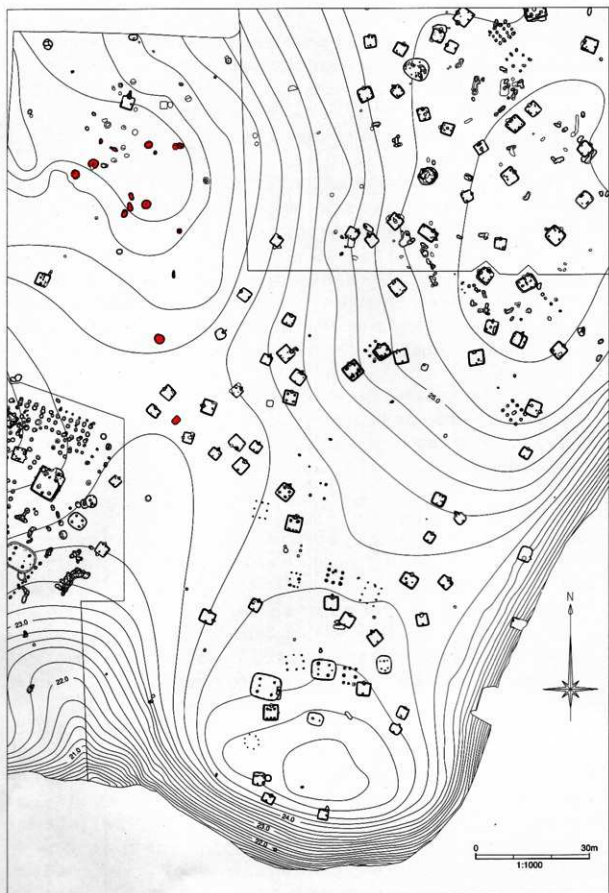


図159 縄文時代中期五領ヶ台期遺構配置図

第2節 奈良・平安時代

上谷遺跡Ⅲ地区の検出遺構の主体は奈良・平安時代の竪穴住居跡であり、それに伴う遺物であった。竪穴住居跡は重複を含めて54軒の検出であり、掘立柱建物跡は9棟であった。そして本地区の竪穴住居は、重複が少ない傾向が窺えた。

竪穴住居跡もⅢ地区に涉ってにおいては、大きく2つの環状に住居跡が展開する傾向が窺えた。一方Ⅲ地区北東のⅡ地区から連なる遺構ではⅢ地区との繋がりよりも、Ⅱ地区からの続きといった方が良いのではないかと思える遺構展開であった。

また、Ⅱ地区に比べ、掘立柱建物跡が減少しており、当該遺構の重複がなかったことが、Ⅲ地区の特徴としてあげられよう。これは上谷遺跡そして同一台地上に所在する栗谷遺跡と合わせて考えねばならないが、掘立柱建物跡が本地区では単位集団の掘立柱建物跡として捉えられないかという問題が発生してくる。Ⅱ地区は掘立柱建物跡を大きく2群に捉えることができ、墨書された文字と掘立柱建物跡群が異なるものとして捉えられたが、本地区の掘立柱建物跡は棟数が減少しただけではなく、集落の中の単位にまでおろして考える手がかりとなるのではなからうか。上谷遺跡Ⅳ地区・Ⅴ地区ではⅡ地区以上の掘立柱建物跡群が残されており、残念ながら、それと対比しなければ何とも言えないのが上谷遺跡の現状である。ここではそのような問題があることを指摘するにとどめ、今後の整理の中で明らかにしていきたいと考えている。

奈良・平安時代の遺物の上谷遺跡の特徴としては、墨書土器の出土数の多さがあげられよう。Ⅱ地区では400点余の出土であったが、Ⅲ地区では120点余の出土となり減少している。この傾向がⅣ地区・Ⅴ地区に繋がるのか、本地区の特徴なのかは整理の進行に待たねばならないが、以下にⅢ地区の墨書土器等について若干まとめておきたい。

第1項 上谷遺跡Ⅲ地区の墨書土器

本地区から出土した墨書土器(線刻・宛描を含む)は127点に及んでいるが、Ⅱ地区の404点に比べ減少はしている。大半が1文字のものであり、記号化されたものも多いが、集落としての共通の文字の傾向も窺われた。

図169はⅢ地区の墨書土器を出土した竪穴住居跡や遺構の分布であるが、当該時期の竪穴住居跡54軒のうち43軒から出土している。他に土坑や弥生時代の竪穴住居跡からも出土しているが、弥生時代のものは流れ込みであり、土坑を含めた検出遺構数は47遺構であった(弥生時代の住居跡を除く)。遺構分布図からは全域に及んでいることが捉えられよう。なお、当該時期の竪穴住居跡のうち、墨書土器が出土していない住居跡は11軒であった。

上谷遺跡では1文字乃至2文字の墨書土器の場合、特定の文字記されることがある。これについて以下に、いくつかの文字のⅢ地区における出土傾向を見てみよう。

Ⅱ地区ではその周辺に住居跡から出土した特定の文字は「得」と万」であった。Ⅱ地区の「得」は97文字に及び、「万」は46文字に及んでいた(重複も1文字とした)。本地区ではその数を激減させ、出土地区もⅡ地区から連なる竪穴住居跡が主体であった。一方点数は少ないが、「竹」「竹野」「野」と記された墨書土器が、本地区では散在して出土しており、集落の特定の文字の変化が窺われるものであった。勿論、両者を出土させる竪穴住居跡もあり、上谷遺跡の全地区の整理と相まって地区ごとの変遷があるのを見なければならぬが、少なくともⅡ地区とⅢ地区では文字の変化が窺われるようである。

また、「大家」は様々な遺跡で出土する文字であるが、「大家」「大」「家」の出土も確認できたので分布図を作成したが、出土する竪穴住居跡が近接する等の傾向が窺えた。

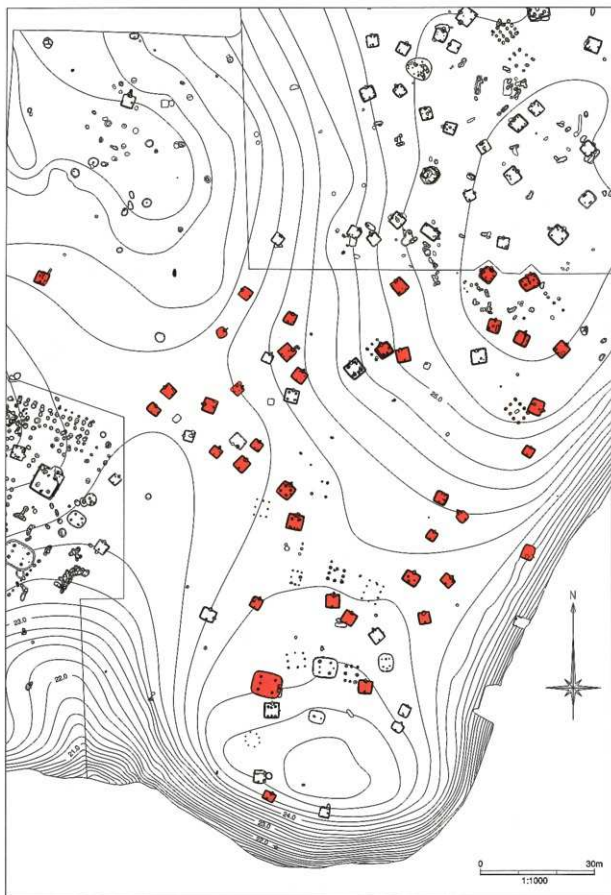


图160 出土文字资料检出遺構配置图

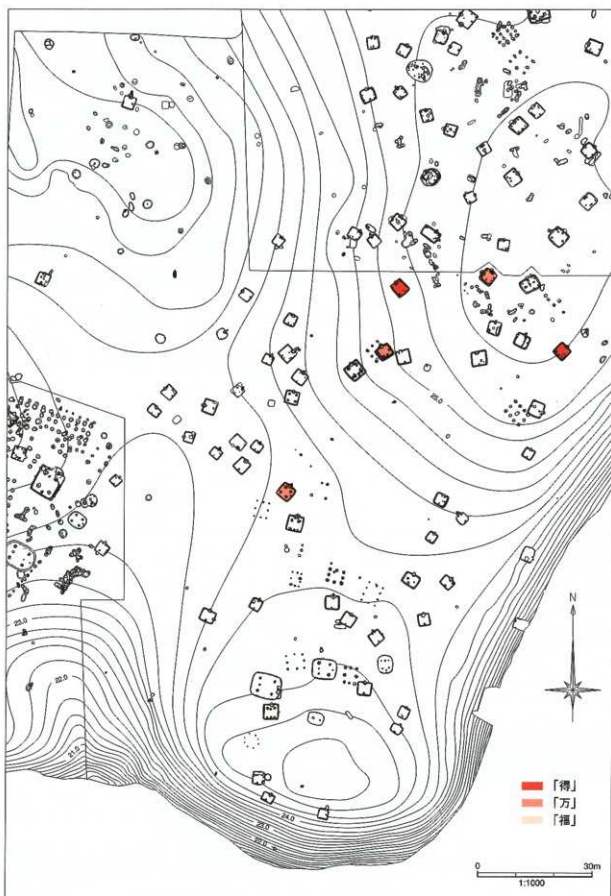


图161 上谷遺跡Ⅲ地区出土文字「得」「万」「福」を出土する遺構

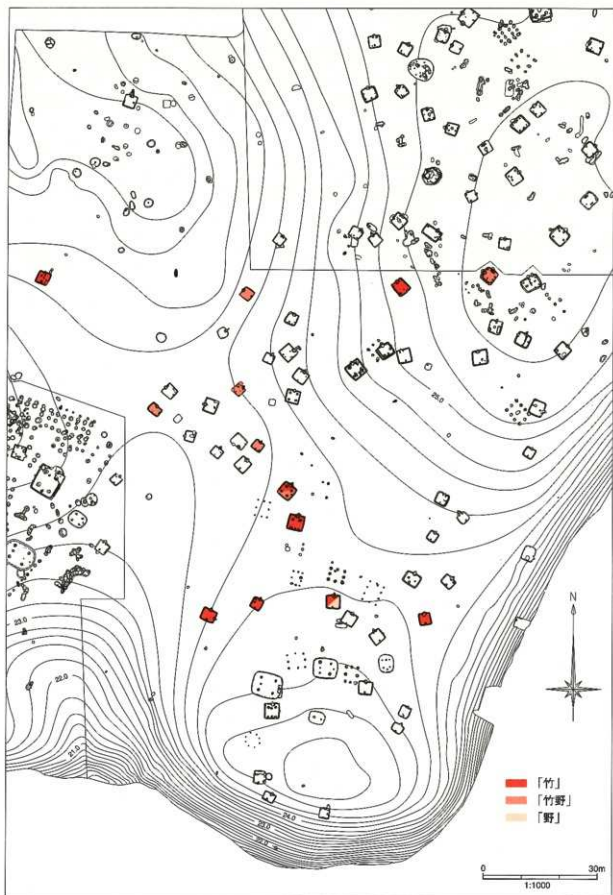


图162 上谷遺跡Ⅲ地区出土文字「竹」「竹野」「野」を出土する遺構

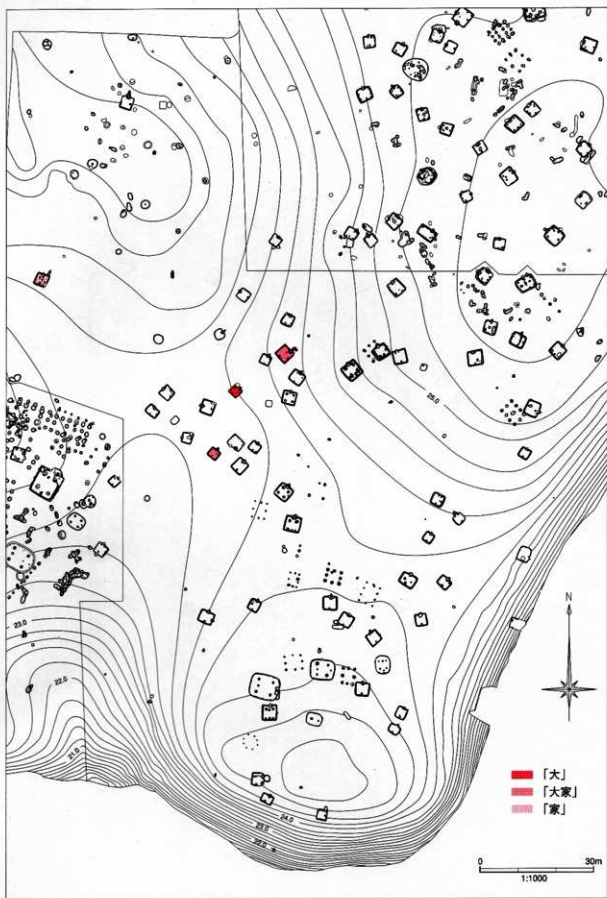


图163 上谷遺跡Ⅲ地区出土文字「大」「大家」「家」を出土する遺構

集落によって特定の文字があることは、萱田遺跡群等の報告によって明らかにされているが、上谷遺跡では今のところ「得」「万」が主体となる文字であるが、中でも少しずつ文字の変遷があるようである。

第2項 長文墨書土器について

上谷遺跡では人名や「国名+郡名+郷名+部姓+名+目的+年号+月日+（人面）」の長文の墨書土器が出土している。また、国名や郡名を除いたり、年号を抜く墨書土器もある。所謂「延命長寿祈願」の墨書土器である。それ以外に判読ができないため意味不明の長文も出土している。

図に示したⅢ地区の長文墨書土器について、まだ、判読できないものもあるがその出土遺構を示した。この分布図から長文の墨書土器の出土が、特定の地区に集中していることが窺えた。

Ⅲ地区の長文墨書土器は土師器甕の口縁～胴部片であり、「下総 / 延 /（人面）」となるものが1点であり、また、「延」と記されたものもあった。そして土師器高坏脚部に「梗」等と記されたものもあった。また、「吉足」と人名と判断される土器も出土している。

本地区から出土した長文墨書土器は、上谷遺跡の他の類例から、これらは「延命長寿祈願」の土器として捉えることができよう。Ⅲ地区においての長文は破片部のため全文を推定するしかないが、「下総 / 延 /（人面）」はⅣ地区で報告することとなる「下総國印旆郡村神郷上マ□刀自召代進上 / 延曆□□年 /（人面）」と同じ内容であると考えられる。

これらの土器がある地区に特定して出土することは、廃棄場所が決まっていたのか、儀式の場所が決まっていたのか、今後検討すべことであろう。

なお、「梗」の墨書土器であるが、人名なのか、種族であるのか判断が迷うところであるが、現在、判読中であり、その結果を待ちたいと考えている。

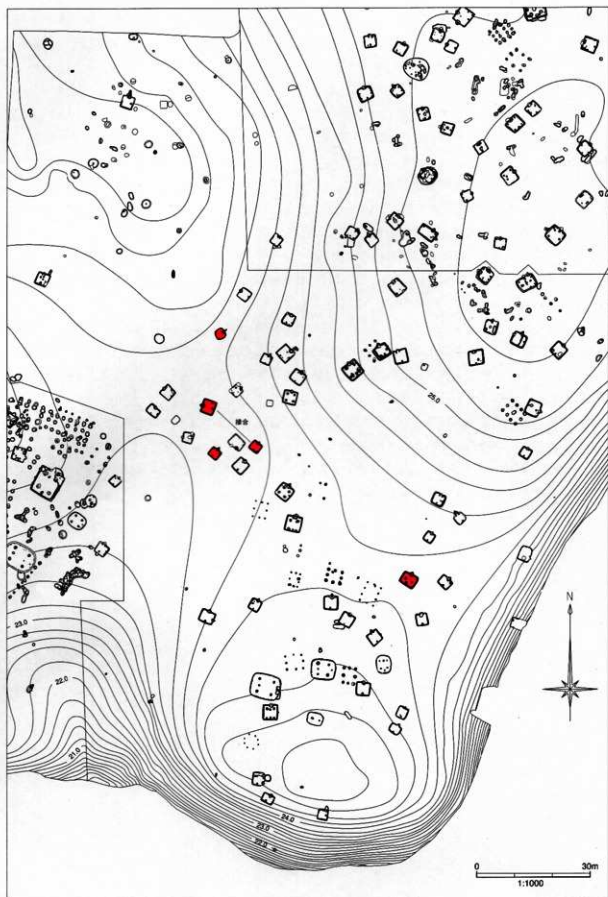


图164 長文文字資料出土遺構図

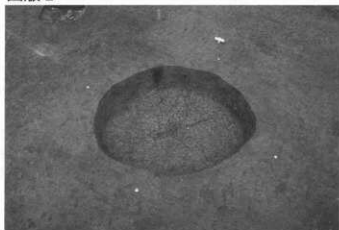
写 真 图 版



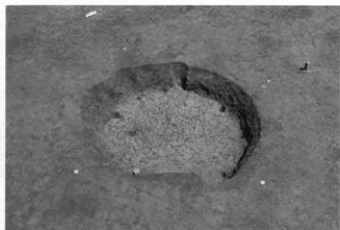
上谷遺跡全景（南側から）



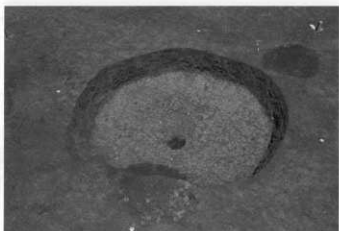
上谷遺跡Ⅲ地区遺構検出状況



A180



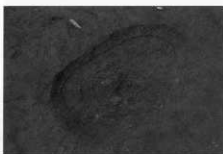
A181



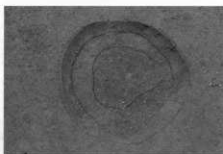
A183



A184



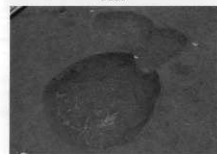
F127



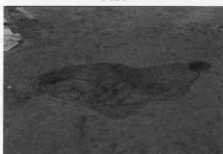
F129



F130



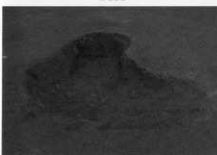
F131



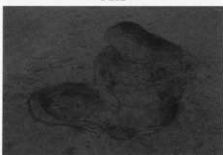
F132



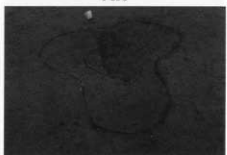
F133



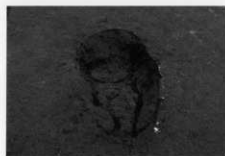
F134



F135



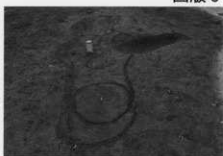
F136



F137



F138



F139



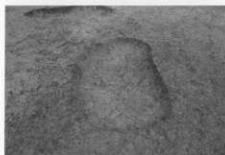
F140



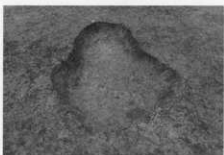
F141



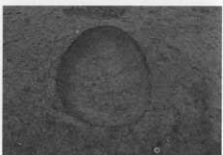
F142



F143



F144



F145



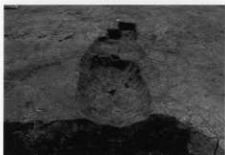
F146



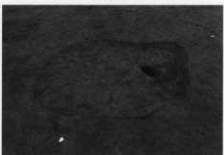
D138



F147



F148



F149



F150



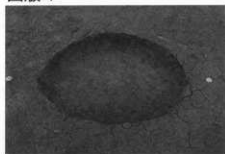
D116



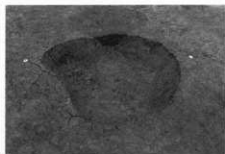
D117



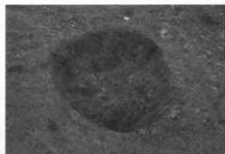
D119



D121



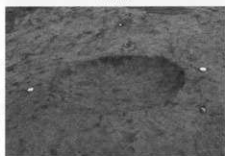
D122



D124



D126



D127



D129



D133



D134



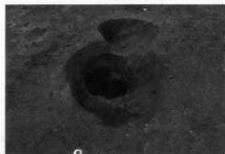
D136



D150



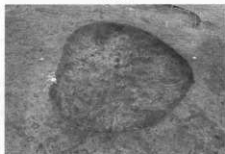
D155



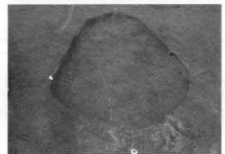
D159



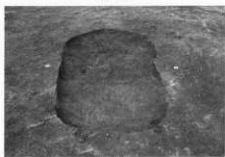
D157



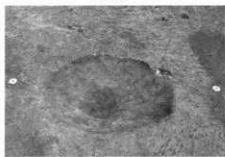
D162



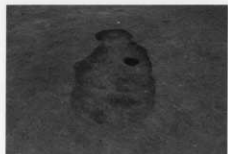
D163



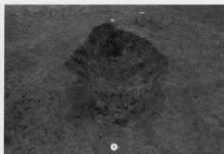
D164



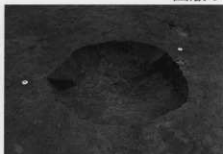
D165



D166



D167



D168



D169



D170



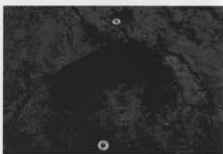
D171



D175



D176



D178



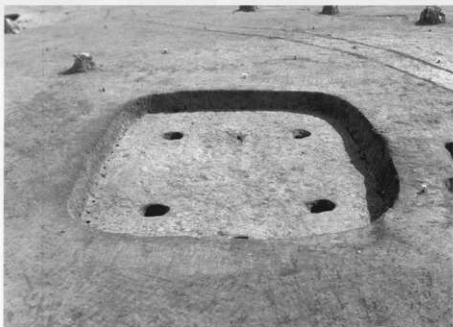
D180



D181



D182



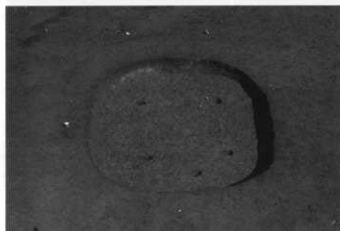
A146



A147



A151



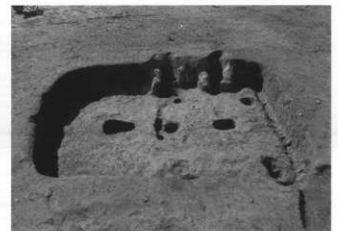
A152



A125



A126



A127



A128



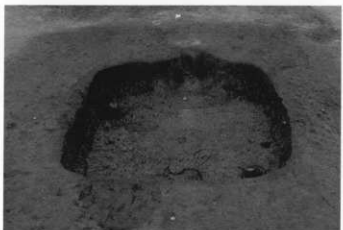
A129



A130



A131



A132



A133



A134



A135



A136



A137